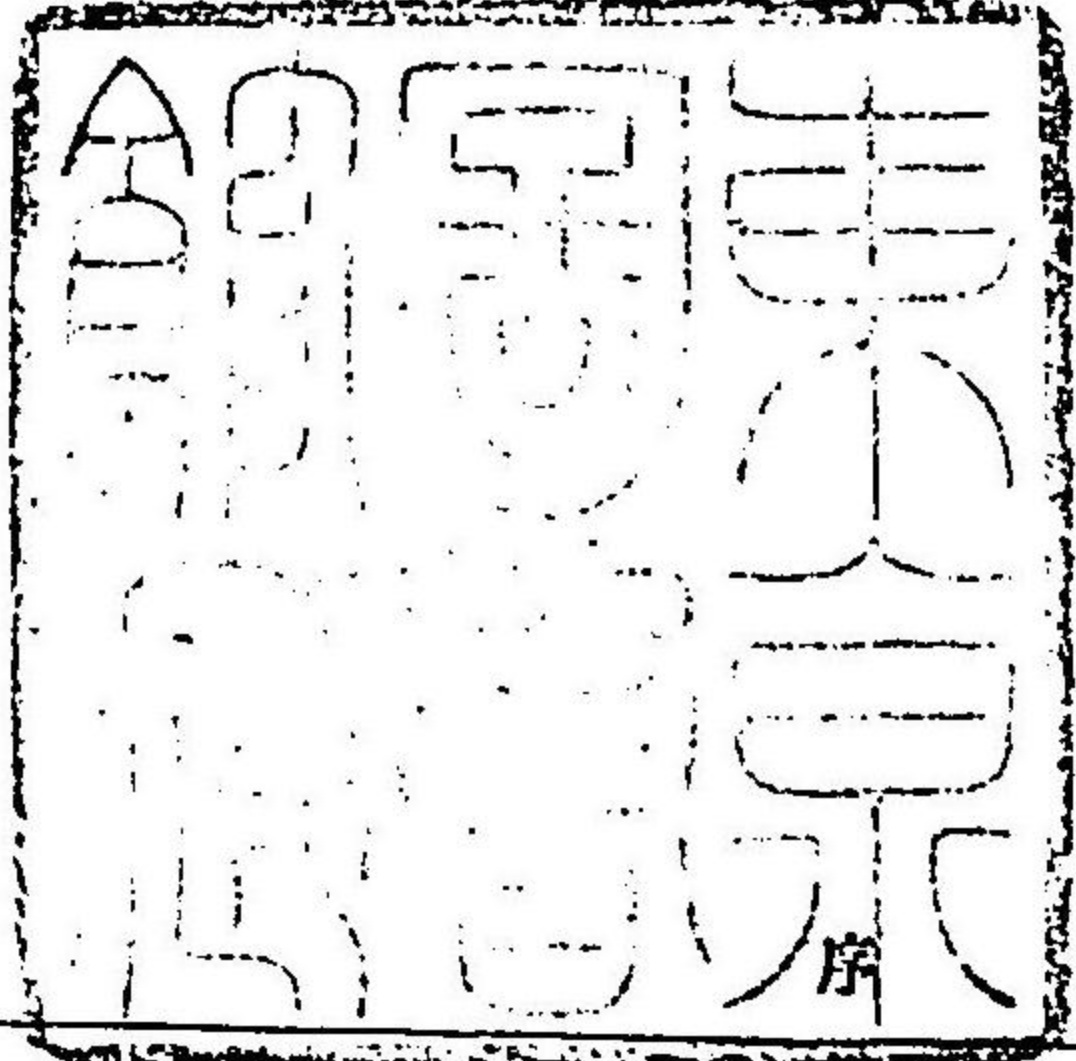


74  
57

釋元恭







(一) 文

序

國家的觀念ハ實ニ宗教ノ骨髓ナリ。在昔高僧一度口ヲ  
 開キ王法佛法ヲ並稱スレハ。天下靡然盡ク之レニ歸依  
 ス。是レ國家的觀念ノ人心ヲ動かセシニ由ラスンハア  
 ラス。而シテ末世ノ凡衲俗僧多クハ其眞意如何ヲ解セ  
 ス。徒ラニ其顛ヲ圓ウシ。其袖ヲ長ウシ。愚夫愚婦ヲ鳩メ  
 テ。因果ヲ論シ。應報ヲ説キ。悟道徹底セリト誇稱スルモ。  
 無情無血冷々然トシテ。死灰ノ如ク。枯木ノ如キニ至リ  
 テ。能事了レリトナス。斯ノ如キノ輩。其一身ニ於テ或ハ  
 以テ屑ウスル所アリト雖モ。豈與ニ國家的觀念ヲ論ス  
 ルニ足ランヤ。僧侶ハ宜ク熱血ナレ。多涙ナレ。勇往猛進  
 仆レテ後止ムノ精神アリテ。初メテ國家的觀念ヲ有ス





ヘシ。鎖國ノ昔時ハ知ラス。屹然トシテ歐米強國ニ對峙シ。而カモ征清ノ一舉。更ニ國威ヲ輝カセル明治昭代ノ宗教ニシテ。苟モ國家的觀念ナクンハ。何ヲ以テ列國ノ宗教ニ抗敵スルヲ得ンヤ。視ヨ。耶蘇宣教師カ如何ニ布教ニ熱心ナルカナ。彼等ハ其宗教ヲ擴ムルト共ニ。故國ナ利セントスル目的ノ爲メニハ。浩渺タル万里ノ鯨濤モ平地ノ如ク。突兀タル千重ノ雲山モ坦途ニ比シ。蠻煙瘴雨。百難ヲ排シ。千苦ヲ冒シテ。死ヲタモ猶ホ辭セス。我僧侶之レニ對シテ。慙赧セサルモノ。果シテ能ク幾人カアル。而シテ予唯ニ之レニ對シテ。慙赧セサルノミナラス。却テ彼等ヲシテ。後ニ瞳若タラシムルニ足ルモノ。釋元恭師一人アルヲ知ルノミ。師ハ天資ノ英邁ニ。非常

ノ勤勉ヲ以テシ。兼テ耿々憂國ノ念。造次モ其胸中ヲ去ラス。一朝異域ノ豪傑ト紀州和歌浦ニ手ヲ握リテ。池中ノ蛟龍始メテ雲雨ヲ得。一枝ノ禪杖。滿清四百餘州ヲ踏破シテ。印度歐洲ヨリ米國ニ遊ヒ。到處刻苦奮勵。六ヶ國ノ語ニ通シ。佛敎ノ外。更ニ三宗教ヲ究メ。又政治法律ヲモ修メ。十餘種ノ書ヲ著シ。又擊劔柔術モ奧秘ヲ極ムト云フ。人若シ其一能ヲ得ルモ。以テ万人ニ誇ルニ足ルト。雖モ師カ絶大ノ雄圖ハ。未タ以テ志ヲ滿タスニ足ラス。身異域豪傑ノ帷幕ニ參シ。神出鬼没ノ妙計。毎ニ人ヲシテ震駭セシム。其政府之レヲ忌ミ。明治廿七年兩國交戈ヲ機トシテ。師ヲ縛スル再三ニ及フモ。師毫モ屈スル色ナク。或ハ其權臣ヲ法廷ニ罵倒シテ。光燄万丈ヲ吐キ。或



ハ戒刀數十ノ勇士ヲ斃シテ。霜光一閃夏寒シ。其膽大天  
 ノ如キ。其快辯懸河ノ如キ。其力鼎ヲ扛ケ。其氣世ヲ蓋フ。  
 政府ノ威力ヲ以テ。遂ニ之レヲ如何トモスル能ハス。況  
 シヤ彼邦人民。師カ碩德慈仁ヲ電仰渴望スル。赤子ノ父  
 母ニ於ケル。信徒ノ菩薩ニ於ケルト一般。其一令ノ下ニ  
 ハ。万人立ロニ集リ。之レカ爲メニ死ヲ願フニ至ル。故ニ  
 身ハ大日本帝國ノ一僧侶タリト雖モ。實ハ彼邦暴吏ノ  
 強敵タリ。是ノ如クニシテ宗教始メテ國家ニ益スル所  
 アリト謂フヘシ。

嗚呼。武ヲ以テ國ヲ建テシ神州モ。文化漸ク開クルニ從  
 ヒ。人情輕薄。士氣消磨シテ。昔日ノ氣慨蕩然地ヲ拂フ。征  
 清ノ一役。僅カニ之レヲ挽回シタリト雖モ。尙古來特有

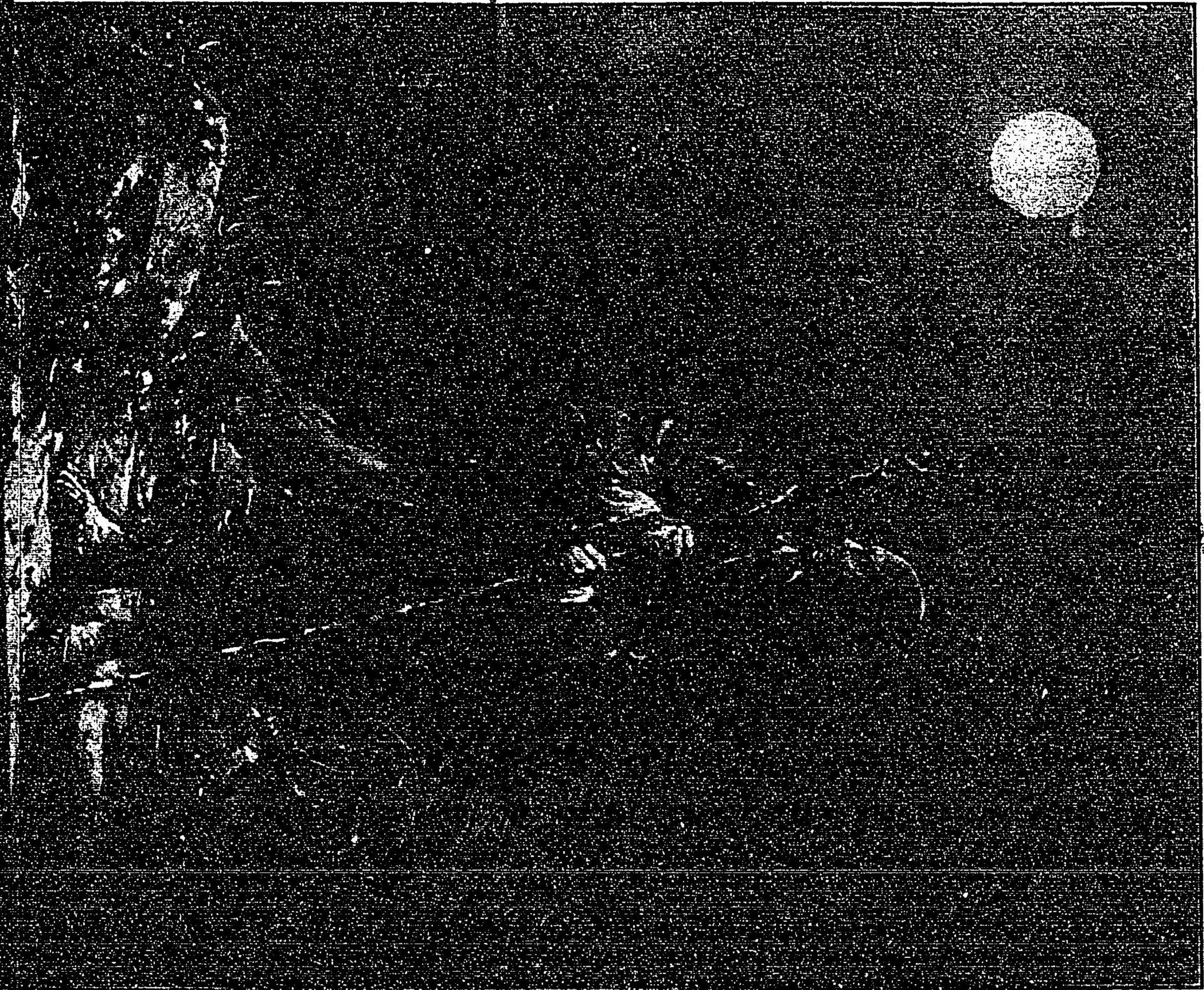
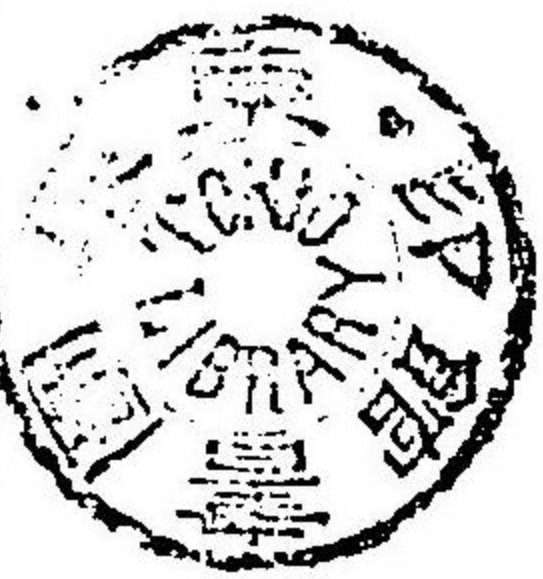
ノ日本魂ヲ發揮セシムル。豈ニ今日ノ急務ニ非ラスヤ。  
 而シテ之レヲ發揮セシムルニハ勢ヒ人心ヲ革新セザ  
 ル可カラズ。人心ヲ革新スルハ。宗教ヨリ善キハ莫シ。然  
 レモ今日世上圓顛長袖徒中。此識見アリ。此奮發アリ。此  
 膽力アルモノヲ索ムルニ寥々トシテ。晨星燭火モ啻ナ  
 ラス。偶師ノ如キ勇僧ヲ得。予竊ニ國家ノ爲メニ之レヲ  
 慶ス。聞ク。師未タ齒自立ニ達セスト。前途悠遠。其學問事  
 業中外ニ煥發スルモノ。必ス多カラン。余今ヨリ刮目企  
 足之レヲ待タン。上島長久氏モ亦予ト感ヲ同ウシ。師カ  
 歸朝スルニ及ヒ。親シク就テ其經歷ヲ叩キ。又師カ郷里  
 ノ故老ニ質シテ以テ此著ヲ成シ携ヘ來リテ予ニ序文  
 ヲ求ム。予之レヲ通讀スルニ。固ヨリ稗史小説ニアラス



シテ實傳ナリト雖也。非常ノ快事ヲ記スルニ。非常ノ快筆ヲ以テシ。字句躍々トシテ紙上ニ動キ。一讀人ヲシテ覺ヘス快哉ヲ大呼セシム。世ノ僧侶之レヲ讀マハ。以テ國家的觀念ヲ起スヘク。少年之レヲ繙カハ。以テ士氣ヲ激揚鼓舞スヘク。而シテ怯夫懦夫モ亦將ニ奮起セントス。著者ノ功亦大ナル哉。

明治廿九年十二月

子爵 小笠原長生識



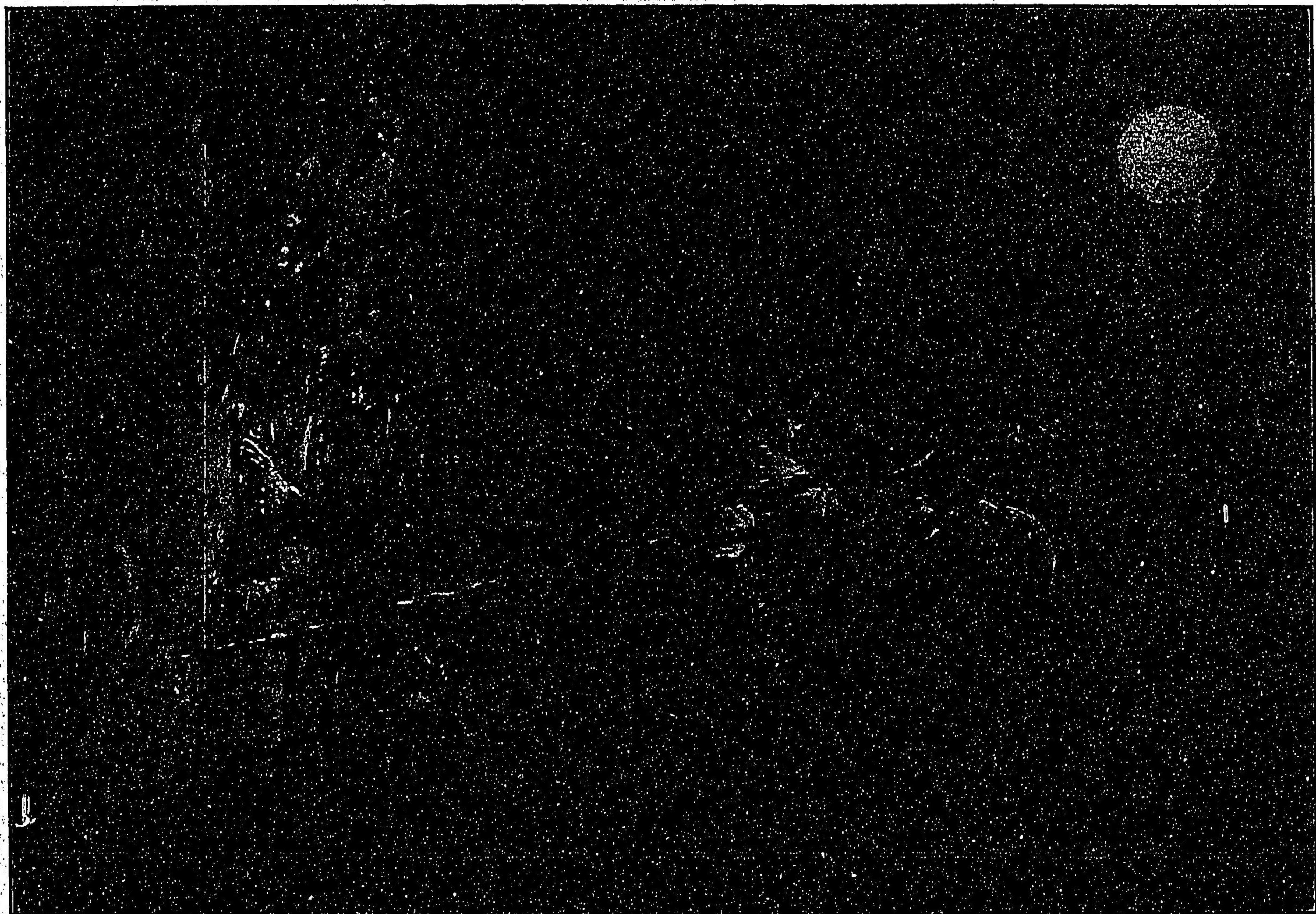
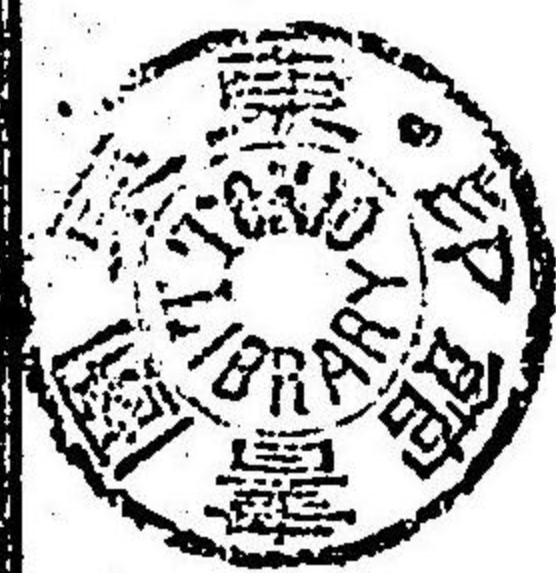


文

ス。著者ノ功亦大ナル哉。

明治廿九年十二月

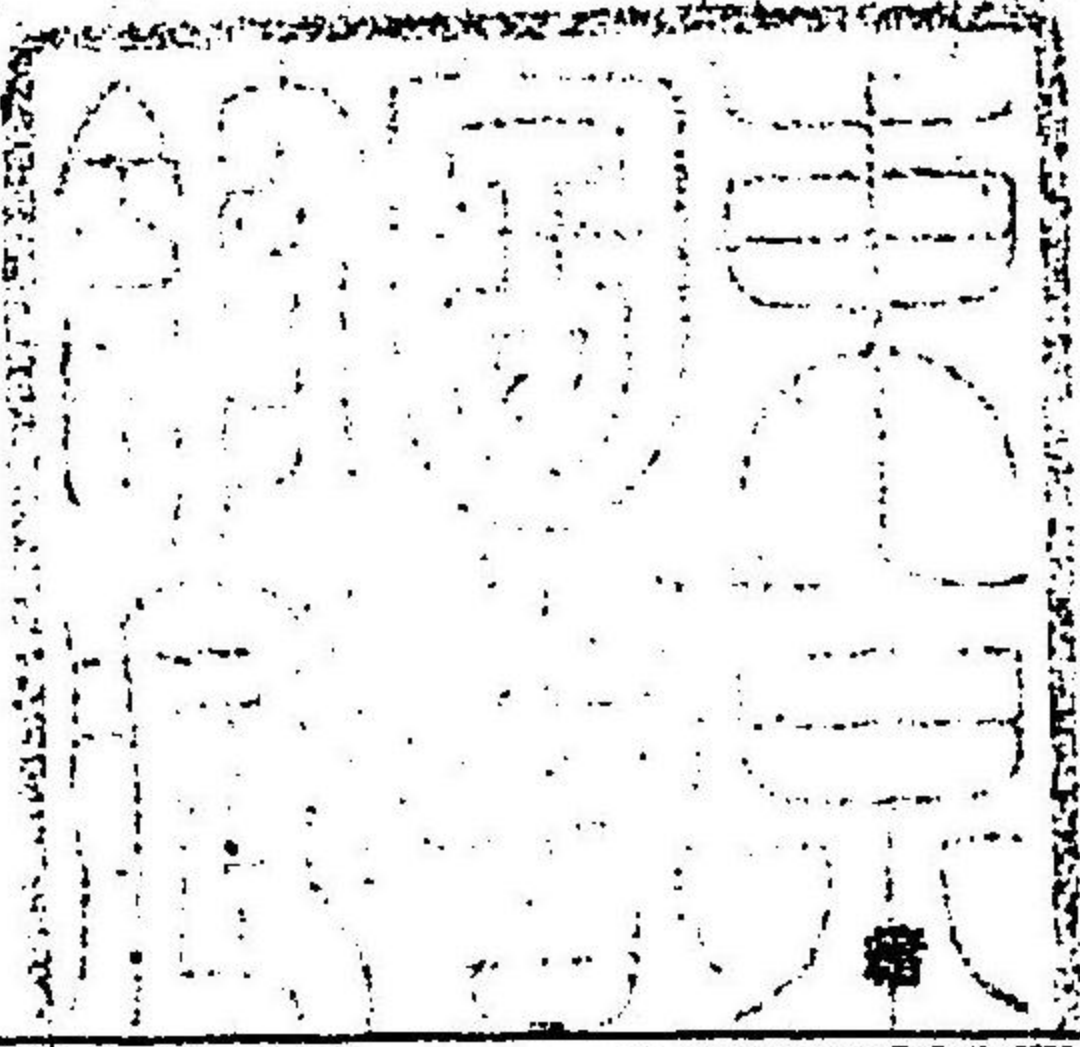
子爵小笠原長生識



(舊氏忠井録)

刷印及版権利影與寫真一川小





(一)

# 緒言

## 畸傑の快事蹟

一枚の天保通寶と數片の文久錢とを伴侶とし。孤身飄然として清國に航し。學は漢歐を兼ね。遊は佛、儒、耶、等の正經を得て。又た其外典に通じ。術は活人の醫と殺人の劍とを極め。年齒未だ三十に満たざる一異邦人の身を以てして。儼然たる清國在野義黨の領袖と爲り。卷くときは寂々として、千仞の淵に潜むと雖も。舒るときは陸離として万丈の奇蹟を逞らしめ。滯たる一身を以て、四億衆に君臨する滿清政府の一敵國と爲り。世界有數の大帝國をして、其名を聞きて心膽を鼓動せしむるに至りては。丈夫の事業として、快も亦た痛快なりと謂ふべし。此



快經歴を有する時傑を誰とみかする。釋元恭氏即ち是れなり。今や帝國の勢威大に伸びんとして。山陞の匹夫も亦た四方の志を起すべきの時に屬せり。此時に當りて此時傑の經歴を傳へ。天下を小とするの意氣を鼓吹するは。蓋し亦た無用の業に非るなり。

但だ釋氏の經歴は爾かく甚だ爽快なりと雖も。之を尋常の眼光より推せば。事或は誇張に失して。其實に副はざるの觀無しとせず。世或は之を架空の談として。其事實の如何を殆ぶむの人あるべし。然れども釋氏の行徑も亦、之を要するに人類の履み得べき行徑に外ならず。勝大に、諷明かに、且つ勉強力に富むこと、釋氏其人の如くんば。進みて其境遇に至らんこと、期して待つべし。故に釋氏の事業や、之を學び易からずと謂ふは則

ち可なり。而も斷じて人類の爲し能はざる所なりと謂ふべからず。且つ夫れ清國の内地は、殆んど無政府と一般の狀あるは。彼の地に通ずる人の詳知する所なり。故に我同胞にして縱横の奔放を、彼の内地に試みたるの人、亦其例に乏しとせず。清人の髮を被むり。清人の衣を服し。清人の言語を用ゐて、其外形を清人化する我同胞は。今日に於ても其人甚だ多し。是等人士の經歴中には、皆な多少水滸英傑的の奇蹟あらざるは無し。清人を以て本邦内地に處せば。片時も是等の事あるを許さずと雖も。律令の散漫にして、民度の幼稚なる清國に在りては。邦人の想像以外、幾多の危険幾多の不便あるべしと雖も。亦た法治的の窮屈なる範圍以外に於て、羈落不羈の士が綽々の餘裕を見出すの機會甚だ多かるべし。之を以て余は、清國の社會にして、



始めて能く釋氏の雄飛を容れ。釋氏の大、亦清國の社會を待ちて益す願はるゝを信ず。而して釋氏が是等の奇蹟は。如何にして能く之を知り得たるか。乞ふ下條に於て之を説かん。

本傳の材料

釋氏が彼の貴陽縣署破獄の活劇を演じて。印度に去りし以後。只だ清國人の或る部面に於て。氏が健在の消息を傳ふるのみにして。氏は果して何れに居るや。其れすら分明ならざりしが。本年八月突然として、氏は其入佛の門たる遼州奥山村の方廣寺に歸山せり。時に余が從事する報知新聞は。氏の經歷を詳かにして、之を傳ふるの舉を起し。余其執筆の任に當れるに依り。余は奥山村に遊びて方廣寺に就き。氏の經歷を求めり。當時釋氏は各地鄉黨の強請に逢ひ。海外渡航を急ぎ居れる百忙中の少閑

を偷みて。遼州各地の歡招會に臨み。余は爲めに不幸にして氏と會合するの機を得ざりしも。寺中の釋氏が法兄弟及び寺門の消息に通ずる各地の人士は。余の爲めに其知れる所を告ぐるあり。殊に余が釋氏に寄せたる質問の一書は。後ち氏の返章に接するあり。固より、氏の雄大にして曲折多き生涯の全部は。之を知悉するに足らずと雖も。氏が經歷の要領に至りては。零ぼ之に通ずることを得たり。京に歸るの後ち釋氏の消息に通ずる二三の人士に就き。釋氏に關する所見を叩くに。其說亦多くは余の知れる所に違はず。此に於て乎。余は安んじて其見聞する所を集め。之を採録して本篇を作すことを得たり。

本書編成の顛末は右の如し。其材料は。曰く釋氏が余に與へたる返章。曰く氏の知人が語れる説話。曰く清國の新聞紙に登載



せる事項。曰く釋氏が遠州に於て自家の經歷を述べたる演說筆記。曰く余が遠州に在りて目撃耳聞せる事實。昔な信ずべき相當の根據あるものにして。之より以外。復た一の粉飾を加へず。又た脚色を施せるもの無し。故に行文風霜の氣に乏しくして。龍驤虎擲の活躍を欠くの罪。光彩煥發せずして氣餘揚がらざるの弊に至りては。是れ余が大方に懇謝する所なりと雖も。正直に有り終に事實を収録したるの點に於ては。余が心竊かに安んずる所のものあり。故に、虎を描きて足らず、動もすれば猫に類するの拙は。余が筆、禿なるの致す所として。甘んじて其實に任ずるの他無しと雖も。斯くて王華を頌して三皇五帝と爲すの惡を犯さず。是れ以て本編の實價と爲すに足らんか。思ふに釋氏の經歷は。其れ自身に於て既に甚だ雄快なり。之に

脚色を加へて其事を誇張せん乎。第二の水滸傳を作る亦必ずしも難じとせず。然れども是れ其人の實歴を傳ふる余の任に適せず。而して春陽堂の用意。亦釋氏の英風を發揮して。後進を奨むるの點に在り。堅く釋氏の實歴以外に馳せんことを思ひり。今原稿を改めて之を修正補綴するに當りても。亦毫も粉飾を施すこと無し。蓋し彼のクロームウエルが所謂「有の儘に余を寫せ」の旨に従はんことを勉むるもの。及ばずと雖も其用心は此に在り。讀者乞ふ之を諒せよ。

釋氏の用心

余が本編を草するに當りて。殊に遺憾を極むるものあり。釋氏の經歷中、最も鋪張すべき點睛の要所たる。哥老會と氏との群密なる關係是れなり。而して此最大要點は。釋氏が經歷中、最



大不明の部分にして。氏若くは氏と其事を共にする、政友の既明を求むるに非ずんば。門外漢の得て之を詳かにすべき所に非ず。試みに釋氏が余に與へたる返章の二三節を録して。氏が用心の存する所を示さん。

○永安の懸擧は。予一人の爲めに發揚せしに非ず。事は○先生にも累する件なれば。筆に爲し難し。○桂平一帯の地は。

○先生の門下最も多き地にて予の知己も亦多し。然れども此地に敬服する程の大徳ある、元恭に非ざれば。支那新聞が桂平一帯の敬服云々は。其實適實なり。尤も哥老會儒者派の名士は。幾分か他地方に比して、桂平に多く假寓し居れり。

然れども三百年來。此地の會員が自ら矛を把て暴動せしことは。一度もなし。桂平地方の暴動として。度々新聞に見ゆるは。

皆獨官の志ある不平黨が。主として誘發する暴民の行爲に過さず。

○前略會の積立金は何億なるや。會員の數は何千万なるや。其邊の事は公けにすべきに非ず。(後略)

○前略畢竟するに進化會は。哥老會の親友の如きものなれば。種々入りたる事情は。今日筆すべきものに非ず。

○立命の脚地に就て。御尋ね有之候が。這是今日自ら申上げざるも。他日指を蓋ひし後に分明可相成候。尤も猪鹿の乾坤に有らし手紙の如きものには。立命の脚地も、安心の頭天も無之候。

右に云ふ○先生とは。釋氏が恩師たる哥老會の首領にして。氏は絶えず會規に従ひ其人の名を告ぐることを肯せず。但だ彼



の釋氏破難の始末を報道せる貴陽週報は。哥老會の首領は呂嘉祥なりと傳へたり。右の如く首領の氏名すら之を公言せず。自家法會中に有する勢力及び地位の如きも。亦輒晦して之を示さず。况んや會の機密に屬する事項をや。而して清國の内情に通ずと稱せらるゝ他の人士も。哥老會の内情には純然たる門外漢多きを以て。釋氏が光彩ある經歷の大部分は。今は全く不明なり。若し釋氏をして世の虛名を銜ふの人たらしめば。世間は此點に付て多くの材料を得たるならんも。釋氏の期する所は遠くして大言せず。亦以て其志の存する所を見るに足れり。氏は實に其行ひを以て其事業を説明せんと欲するものと謂ふべし。但だ眼外の眼を開けば。釋氏が經營の大跡亦之を勞瘁の間に、認め

得べからざるに非ず。讀者亦必ず之を心會するあらんか。則ち其經營の大小輕重豈に復た余が不文の筆に須たんや。

明治念九、天長節の夕

笠山 上島長久 識



目録

緒言

目録

緒言

日本の僧釋元恭……………一

突然の歸朝……………六

師弟の奇縁……………一六

元恭の勢力……………二六

元恭の眞面目……………三二

漂然の出發……………三六

幼時の元恭……………三一

幼時の修學……………三六

元恭佛門に入る……………四二



二

奥山の方廣寺	四八
俊敏の雛僧	五三
渡清の志望	五八
異人元恭を試む	六四
哥老會頭呂氏嘉祥	七一
決死の訣別	七九
龍支那海を亂る	八六
呂氏の私塾	九一
在清中の學問	九七
嘉祥と武藝	一〇三
武術の練習	一〇九

元恭の足跡	一一五
清國の在野黨	一二〇
哥老會の規律	一二六
哥老會の兄弟	一三二
元恭と哥老會	一三七
單關臺の奇難	一四三
魯國大佐を救ふ	一五〇
征清戦役中の遭難	一五六
洞庭湖畔の危難	一六二
眼中人無し	一六七
貴陽縣の大難(上)	一七三

13/2



貴陽縣の大難(中)……………一七九  
 貴陽縣の大難(下)……………一八五  
 黄口の擾亂……………一九一  
 永安の一揆……………一九七  
 元恭の學藝……………二〇三  
 今那くにか在る……………二一〇

………二一六  
 ……二二〇  
 ……二二〇

# 釋元恭

上島 笠山

## 日本の僧、釋元恭

(一)

今を去ること五年前、明治二十四年の頃と覺ゆ、清國揚子江岸に、哥老會員の蜂起せしことあり、其勢頗る鋭くして、内は清廷を震懼せしめ、外は本邦に迄も轟き渡りて、世には是れや清國革命の動機たらんかと思像するもの甚からず、我邦にても少壯血氣の志士は、イテや清國に推し渡りて、一臂の力を彼の黨に貸さんと、勇める人も無きに非ず、世は一眸に耳を聳て、其形勢に注意したるが、其頃の事なりし、彼の黨與の頭領中、



日本の僧、釋元恭なるものありとの事、清國の新聞紙に見えし由報するものあり、釋元恭てふ好名詞は、此時よりして我邦人の一部に記憶さるゝに至りしなり、世運一進して明治廿七年に至り、舉國一致して清國と兵馬の間に相見ゆるに及び、清國の新聞紙は、又復日本の僧、釋元恭の事を報するものあり、曰く、山東省に於て豫て連絡せる一黨を結束し、機を見て爲す所あらんとすと、此に於て乎、日本の僧、釋元恭なるもの、深く清國英雄の心を攪れることは、愈々我邦民中に明かなるに至りぬ、之と前後して我皇軍の向ふ所、水陸の敵皆披靡して、旭日放光の軍旗は、愈々深く敵地に入るを見るに至りては、邦民の意氣益々揚りて、匹夫匹婦も亦皆滿心の歡喜を表せざる無く、筆を抵して思ひを北京城頭に馳するが中に、獨り同胞をして痛心に

堪へざらしめしは、孤身飄然として、清國內地に寄泊せる我同胞の身の上なりし、是等の中には有られも無き冤罪を負はせられ、殘虐なる暴政の處分を受けしも少からず、殊に偵察の職に當れる人々の如きは、聞くも痛ましき終りを遂げぬは無ければ、義侠なる我同胞は、一面に戦勝を慶して一面に忠死の軍人軍屬を惜むと共に、他の一面に於ては深く同情を在清の我同胞に寄せ、清國の暴政に公憤を發するの傍ら、厚く敵國在住の我同胞が無事を祈らざるは無し、此時に當りて、所謂日本の僧、釋元恭も、曾て一たびは暴虐の處刑に逢ひしやに想像されしことあり、知ると知らざると皆之を惜み合へりしが、何ぞ圖らん、一大快報は清國の貴陽週報に依りて傳へられんとは、右貴陽週報の記事は、廿七年十一月中の『日本』新聞に譯載せ



られて、日本の僧、釋元恭が、貴陽縣署の法廷に於て、絶倫の  
 武勇を現し、清國警察官の重圍を破りて、跡を同國在野黨の裡  
 に晦ましたる、痛快なる活劇の顛末は、明細に報道せられたり、  
 豫てより、釋元恭の名詞に接して、其人と爲りを想像し居りた  
 る我同胞は、此に至りて愈々其快男兒たるを認め、曩に其安危  
 を氣遣ひたるものは、殆んど死者復活きて踴躍するの思ひあり、  
 其活劇は一世に喧傳せられて、所謂釋元恭は、此に於て平日  
 本全神の誇稱物となりぬ、之より後ち皇軍益す其武を揚げ、海  
 には敵の水師を殲滅し、陸には敵の要害を抜き、敵の首都たる  
 北京は、赤條々ど爲りて將に我軍の銳鋒を蒙らんとするに至り、  
 清廷遂に屈して和親舊に復す、而して彼の釋元恭なるものは未  
 だ其跡を世人に示さず、或は西藏を経て印度に遊べりと云ひ、

或は亞細亞南方を行旅し居れりと傳へ、其消息區々にして之を  
 確むるに由無く、人は皆風を捕へ影を捉ふるの感に堪へざりし  
 が、和約定まるの後ち一年二ヶ月を経て、本年八月に至り、徒  
 らに思ひを亞細亞大陸に馳せて其踪跡を想像し居りたる我同胞  
 は、突如として釋元恭を其故山たる遠州の奥山村に見出せり、  
 正に是れ水雲万里の外に在るの人、忽然として脚下に湧けるも  
 の、世は皆其出沒の不可思議なるに打たると共に、勇僧釋  
 快僧元恭、禪門の獅兒、大陸的の日本男兒等、有らゆる世評は  
 士を捲て重ねて釋元恭の身に來れり、而して此世評の主人公は、  
 人生の毀譽何の關する所も無く、樹深くして巖古き方廣寺の靈  
 場、靜座し、恰も雲の心無くして岫を出で、鳥の飛ぶに倦みて  
 巢に歸るが如し、其外形は斯の如しと雖も、其心機は未だ容易



に端倪すべからず、知らず、此日本の勇僧は何の爲めに歸朝せ  
るか、乞ふ先づ歸朝當時の現状を叙して、後ち其經歷に及ば  
ん。

突然の歸朝

抑も元恭其人が、丁年未滿の身を以て、驟然方廣寺を脱せる既  
に突如たり、其清國に航するや亦突如たり、一足の草鞋、亞細  
亞、歐羅巴、亞米利加を踏破せる亦突如たり、其日清戦争の際  
に當り、忽然として清國湖南に顯はれ出でたる最も突如たり、  
斯の如く突如として清國を脱し、突如として歸朝す、其行動は  
恰も電光の倏忽として隱顯するが如し、蓋し彼れも亦人なり、  
敢て筋斗の雲に駕するの奇術あるに非ず、常人の如く、歩行し、

車行し、舟行し、航行するものに外ならずと雖も、其潛むや用  
意慘憺を極め、恰も大魚の深淵に藏るゝが如きを以て、其現る  
ゝや實に煙花の虛無空中に迸散するの概あり、其人既に此本領  
を有せり、今より以後亦突如として、何れの天地に顯はるゝや  
も知るべからず、但だ本年の歸朝に至りては、元恭亦竊かに何  
事かの計畫を有し、無聲無形の間に、之を結了せんと企て居り  
しが如く、其突如として、人の耳目に觸れしは、或は氏が意想  
の外なりしならん、而も是れ只だ想像に過ぎず、其電光的歸朝  
の目的畢竟那邊に在るかを問はば、想像以外復た説の下すべき  
なし、今是等の想像を避け、元恭が知人に語れる言を假りて、  
此突如たる歸朝の目的を説明せば、曰く、「固より歸朝するの必  
要は無かりしも、只だ何となく歸心矢の如く成り行きて、抑ゆ



るに抑へきれず、自分が修學の目的より云へば、誠に無用の事ながら、一先づ歸朝することに決心したり、と此説明に従へば、其歸朝は平々として他の奇なく、淡きこと水の如きの意味を有するに過ぎず、之を普通一般の人情に照して、其意味を敷衍すれば、胡馬の北風に嘶き、越鳥の南枝に巢ふは、其故郷を偲べばなり、生を畜類に受けしものすら、斯の如くなれば、人たるもの、争か望郷の念無きを得ん、世を捨て、身は無きものと思へども、雪の降る夜は寒しとの歌は、僧界、出世間門一般の情を表示せる至言なるべし、左れば身に幾万英雄の付托を擔ひ、前途大有爲の事業に向つて、勇猛精進するの外、人生の喜怒哀樂を見ること、フィヨウ島の蠻民が、我三陸の海嘯と歐洲航路の開始とを見るが如く、毫も其心に介すること無き、大本領を

有する元恭も、決して人界の範圍を超脱する能はざるは、固より當然の事なれば、十有餘年相見ざりし懐かしき日本が、戦後飛躍の現状を、久し振りにて見まほしと、思ふ心の起らずやは、巴蜀、山高く、長江、水滿つるの處、勃として歸心の胸底に湧けるも、亦宜なりと謂ふに終らん。  
 思ふに右の如きもの、其歸朝の理由として少くとも半面の道理はあらん、左れど之を以て未だ其全面を盡せりと爲すべからず、開は既に緒言中にも之を述べ、後段にも亦之を説くが如く、事の哥老會に關するものは、元恭其人の口は堅く閉ぢて其消息を漏らさず、又事情決して之を漏らすべきに非るが故、其機密に參與するもの、外は、何人と雖も之を吐かしむべきに非ずと雖も。凡そ奥山地方に在りて、當時元恭に親炙せる人々は、是れ



等政治上の觀念を胸底に蓄へ、其實際を聞かんと試みたること無く、多くは奇談珍説を聞かんと望める側の人なれば、其事情の通ぜざるも亦無理ならず、現に右に述ぶる歸心矢の如くなりて歸朝せりとの事を聞ける人も、鄉黨の老人にして、所謂秘密の園内に入らんと試みしに非ざれば、直ちに此説明を以て満足すべきに非ず、然れども歸朝の理由として外に顯はれたる話説は、右の如きに過ぎざるを以て、表面の理由は之を此に止め、裏面の理由は不立文字の見地を立て、無字の文を讀むの外なかるべし、但だ元恭其人が突然の歸朝は、不思議にも氏の恩師たる、今井東明和上の遷化の期に際し、其入寂に先だちて師弟再會するの原因と爲り、氏が其恩師に對して、弟子の道を盡すを得たるは、實に稀有なる奇遇にして、亦元恭傳に特筆すべき一

事實なり。

師弟の奇縁

今井東明和上と呼べるは、方廣寺一山の衆徒は云ふに及ばず、山下の六派三百六十箇末寺の僧侶が、大和尙と崇敬したる、遠州奥山村なる方廣寺の住職にして、身を尾州より起し、臨濟宗の禪律を修めて、道徳最高く、維新後末寺の一統より撰擧せられて、方廣寺の方丈に昇りし人なるが、永年の間道徳堅固に行ひ濟し、山門の内服に葦酒の入るを許さず、法の燈愈々明かにして、信徒の歸依益々厚く、遠州、參州地方の善男善女は云ふに及ばず、車夫走卒に至るまで『御山の御隠居様』と唱へて、其徳風に靡かぬもの無く、禪宗有數の名僧たりしなり、元恭は



此東明和上を師として、始めて佛門に入たりしが、和上は、特  
 に忍辱柔和を主とせる有徳の僧なりしかば、其徒弟等に對す  
 る教訓の如きも、懇切を極めし中にも、別けて、元恭坊が有爲  
 の材たるを看破し、氏が成童の頃、學問進々上達するに及びて  
 は、『常に元恭は我門の尤物なり』と稱揚して、深く其才を愛し  
 たり、左れば和上が下山して近在へ法要に赴くの折、元恭坊を  
 伴僧に従ふる場合には、元恭坊は師の荷物調度どもを負ひつゝ、  
 師に随ひて恭順を極めしが、人里を離るれば師は元恭坊を顧み  
 て、『好しく其荷物を寄越せ』とて、自ら之を負ひ、劬はりつ  
 つ連れ行きしを見たる里人も少からず、慈愛に厚き師の待遇に  
 は、里人も深く服して、今に彼等の談柄と爲れり、傍人の見る  
 所すら斯の如くなれば、之に直接せる元恭は心に其恩を感銘せ

しこと謂ふ迄も無し、仁者壽長しとの古言に漏れず、東明和上  
 は、頗る老健の人なりしが、本年は七十二の春秋を積みたる事  
 とて、六七月の交に至りては健康勝れず、病勢は日に増し差し  
 重る模様なりしかば、一山の衆徒皆眉を顰むる内、和上は正念  
 の大往生を遂ぐべき時の來れるを知り、『皆の弟子達に危篤の由  
 を告げ知らせよ』と云ひ付けたりしが、和上の取り立てたる徒  
 弟達は、今は皆歴々の學業を積み、末寺の住職となれるも少か  
 らず、何れも師の病に赴きて、其病苦を慰めしかば、和上は深  
 く喜び、身後の事ども夫々教ゆる所ある中に、元恭の事を思ひ  
 出すに及びては、悟道通達の身にも、臨終の際に一目會ひたき  
 思ひ無きことを得ず、『皆が揃ふて見舞ひ呉れ、此上の満足は無  
 けれど、取立てし弟子の斯揃ひし中に、元恭のみは何れに居る



や、消息さへも知れず、後に聞き知らば、彼も左こそ本意なく思ふならめ、余も一目會ひたし」と厚き慈愛の心を洩せしこと屢々ながら、衆徒弟も亦之を慰めん術もなく、只管額を鳩めて、元恭其人の身の上と思ひを馳せ、徒らに想像を廻らし居るに過ぎざりし、然るに元恭は固より和上の危篤を知る由も無く、久し振りに歸朝して、神戸より先づ東京へ向け、涼車にて急ぐ道すがら、濱松付近に差し掛りしとき、車中の人々が四方山の咄しの中に、「方廣寺の方丈は危篤なり」との事を云ふものあり、道は容易ならずと打ち驚き、直ちに濱松に下車して之を確めしに、和上の危篤は、掩ふべからざる事實と知り得たれば、道を轉して師の坊なる方廣寺に駆け上れり、「元恭が参りて候ふ」と云ふ聲は、東明和上の耳に入りぬ、和上は眼を開きて元恭の顔

を見詰むるのみ、何の辭も出でずして、先づ病床より衰へたる双手を差し伸べ、堅く之を合掌し、暫くの間は一座打ち沈みて一語無く、森々として只だ眼眸の濡ふを見るのみなりしが、和土は儘かに語を發し、「能ぞ歸りつる」と、再び三たび繰り返して、不勝の喜びを表せるを始めとし、夫より互に彼れ一句、此れ一句、過ぎ越し方の物語りして、十有餘年相見ざりし、師弟一統此に團圓し、和上は何の思ひ遺す所も無く、愛弟子元恭の介抱を受け、終に溘然として大往生を遂げぬ、和上の遷化は、實に明治廿九年八月五日にして、元恭の歸着せしは、正に同月二日なり、因縁合せざれば、比隣も其死期に及はざることあり、然るに天涯万里、雁信既に絶えたる時に於て、此奇遇を得たりし師弟の契りは、能くくの深き因縁なりと謂ふべし、無垢



なる里人は此奇遇を見て、全く方廣寺の権現、半僧坊の御引き合せなりとて、彌増に其靈驗を渴仰し居れり。

元恭の勢力

前にも云ふ如く、元恭は大に前途に期する所あり、若し出来得べくんば、隱形の術を施してなりとも、跡を江湖の外に翳晦せんと欲す、左れば歸朝の事も成べく秘密に付し、世間の口の端に上らんとを避け居りしが、一點の燈光も暗夜に在りては、其所在著るし、抑も遠州引佐の郡奥山街道一帶の地方は、東海道を山手の方に離れたる土地程ありて、之を都會に比すれば、風俗特に太古の風あり、試みに其一例を舉げんに、洋服着たる人物を見れば、壯者は仕事の手を止めて目を仄たてし之を眺め、

小供は點頭して、敬禮を表し、三度笠、脚絆、甲掛の粉装を見慣れたる在家の犬は、野獸の人立するが如き奇怪の現象に驚きて吠え立つる杯、素朴の田舎、沿道に點在するを以て、少しく異様の風彩を帯ぶるものは、忽ちにして里人の目に止まらざるを得ず、然るに元恭の如きは身久しく、異域に在りて、僧にも非ず、俗にも非ず、一種異様の風彩を具ふるを以て、氏が濱松より奥山に至るまでの行程中、里人の注目は、自然に氏の一身に集まるの勢ひあり、斯氏を注視したる沿道幾百の里人中には、十餘年前の元恭坊を見知れるものも亦少からず、爲めに誰云ふとなく、「元恭さんが御山へ歸られた」と云ふの聲は、奥山を中心として、遠近一帶の各地に廣まるに至りたり、若し元恭其人にして、尋常の僧侶ならんには、三五人十數人が語り傳ふる、



話柄に止まるべけれども、彼の清國廣西省に於て、痛快なる大活劇を演じ出せる結果として、釋元恭なる名詞が、昔く日本全國に公布せられ、世界に對して日本全國の一誇稱物と爲りしと同時に、其方廣寺との關係上、遼州に於ては亦日本全國に對して一大誇稱物と成れり、左れば『己れが國さで見せたいものは』の歌謠、若し遼州人士の手に成れりとせば、必ずや今切の長橋と、釋元恭てふ名物とを取りて、國自慢の第一に數へ、盛んに其偉蹟を歌ふなるべし、釋元恭の名が、遼州人士を感動せしめたる勢力は、右の如く大なり、左れば『元恭歸れり』との聲が、遼州人士の耳に感ずる有様は、恰も日本國民の耳に『南州歸れり』との聲が聞ゆる如く、殊に引佐郡一帶の地方は、水村、山郭、至る所として元恭の名を唱へざる無く、幾くも無くして『元

恭歸れり』との事實は、遼州に公認せられ、其結果として歸山の事實は東京迄も喧傳するに至れり、事此に至りては、元恭如何に一般の社會より隠れんと欲するも、社會は決して之を許さず、随つて元恭君歡迎の聲は、先づ方廣寺の脚下たる、奥山村に起り、鄉黨團結して公會に臨席せんことを請ひたり、其熱心なる敬愛の情には、流石の元恭も之を拒絶するに忍びず、遂に八月某の日を以て、奥山村の催せる歡迎會に臨み、一場の演説を試みて、自家が經歷の一部分を述べたり、一たび奥山村の招聘に應ずる以上は、更に他の鄉黨の招聘に負くこと能はず、各地の鄉黨も亦奥山村を例として、苦ろに其臨席を申し込み、所謂元恭君歡迎會は毎日引佐郡の各地に行はるゝに至れり、當年方廣寺の一離僧が、斯る敬愛を各地より受くるは、正に是れ



錦衣郷に還るの有様にして、普通の人情極めて之を得意とすべ  
 き所なり、左れど元恭は前途に重大の目的を有せり、之を成  
 せざんば、元恭の元恭たるを爲さず、而して元恭が當時の状況  
 は、之を要するに悠々として故郷の山水に放浪する閑日月を有  
 せず。身邊には急速外國に航すべき用向を帯び居りしかば、江  
 東の父兄を相手に、中央亞細亞の奇談を説き、寛々として時日  
 を費やすの適を有せず、故に苟も辭し得る限りの場所は断然之  
 を辭し、日を刻して數ヶ所を巡回し、雨を衝き泥を蹴つて、一  
 日に數里を隔つるの各地に奔走し、鶏を聞きて寺を出で、鶏を  
 聞くの時僅に寺に歸り、匆忙の状特に驚くべきものあり、而し  
 て元恭は勉強して倦まず、此間に處して緯々餘地あり、講壇に  
 立つときは、滔々として懸河の辯を振ひ、私室に在るときは、

醇々として筆を揮ひて紙に臨み、以て人の書を求むるに應ぜり、  
 亦其事を爲すに當りて精悍無比なるを見るべし。

元恭の眞面目

元恭歸れり、歸れる元恭は、廣く遼州の父兄に見へたり、當時  
 遼州の父兄が眼に映じたる、元恭其人の面目は如何、遼州の父  
 兄は固より元恭が傑物たるを信仰し居たり、左れど其傑物なり  
 と云へる信仰の理由は、元恭が武勇絶倫の點に在り、所向無前  
 の勇に在り、故に遼州の父兄が、元恭の面目を想像するに當り  
 ては、彼れを以て水滸傳中の人に擬せり、若し其人を取り來り  
 て之を例せば、華和尚魯知深にして多少の學問を有し、多少の  
 才氣を有し、而して又大和魂を有するもの、即ち釋元恭其人な



りと爲せり、這は是れ遠州人士が一般の想像なりしが、其人に接して其眞面目を熟視するに及びては、殆んど人違ひには非ずやと疑ふ計りなりし、試みに、當時遠州人士の眼に映じたる元恭を取りて、其人を物色せん乎、元恭の眞面目は實に左の如かりしなり。

元恭の身幹は高き方にして、其肉は肥ず又瘠せず。即ち所謂中肉にして、眼光鋭しと雖も、亦掬すべき慈愛の清味を湛へ、之を概括すれば寧ろ柔和なる相好を備へ、決して虎聲遠々、腕は險に、手は辣なる、粗笨の態を有せず、其外形に於ては断じて武断一片の人にはあらず、而して其口にする所を聞くに及びては、愈々意表の感に堪へざるものあり、人の清國に於る活劇を問ふものあれば、『貧道固より僧侶の身に候へば、職として殺を

嗜むの事あるべからず、左れば、止むことを得ざるに際しては、時に劍戟を弄したることもあれど、是れ皆正當防禦の爲めにして、我より進みて事を構へたることは無論之れ有らず、随つて武略若くは勇功などは、毫も清聽を煩はす程のもの有せず』と答へ、問題一轉して宗教の事に移るに及びては、古に入り、今に通じ、東洋に渡り、歐西に及び、混々として盡くる所を知らず、耳順の老僧も案を打つて歎じ、後進の俊才も耳を傾けて謹聽せざることを得ず、其學の博くして識の高きこと、殆んど測知すべからざるものあり、眼を閉ぢて其説のみを聞けば、凡骨進化して仙骨と爲りたる老僧の高僧かと疑はる、其専門の宗教に屬するもの、固より斯の如くなるべしと雖も、元恭の學識は更に多岐に亘りて、其理解する所の國語は、清國、印度、英、



蘭等を兼ねて之に通ぜざること無く、科學としては法律を極め、且つ醫學に通じ、時に又農藝、土木工學の區域にまで論入することあり、梵字の原書に依りて佛典の蘊奥を説き、英蘭の書を繙きて基督教を論じ、紙に臨みて一抹すれば、筆は忽ち龍躍り雲奔の妙あり、遠州の父兄は、大武人としての元恭を見失ひて。單に大學者としての元恭を認め得たり、元恭其人の眞面目は、前者に在らずして後者に在るを悟りたり、此に於て乎、遠州の父兄が元恭其人に對する評價は、頓に幾層を進むるに至りぬ。

元恭の本領は既に其豫想に達へり、一轉して其人物を覗ふに、英氣煥發して、中に狎るゝべからざるの威嚴を包み、當るべからざるの機鋒を藏するが如しと雖も、其外形に顯るゝ所のもの

は、温然として玉の如く、世界の廣きを見ること、恰も濱名湖中の小嶋を見るが如く、其終生の大目的は、遂に那邊に在るや知るべからず、遠州の父兄は、此に至りて元恭が胸中の深淺を測量する能はざるなり、翻へりて其成功したる事業を考ふるに、年紀未だ三十に滿たずして、此博弘の學識を兼ねること、既に甚だ異數なるに、劍は百人に敵して響響せざるの武あり、足は世界を蹂躪して疲憊せざるの力あり、更に再び神州を辭して、中央亞細亞の地を極めんとするの意氣あるに至りては、到底凡人の得て企て及ぶべきに非ず、思ふて此に至れば、元恭の價値は益す高く、今迄は單に敬愛すべき傑物なりと思ひ居りたる遠州人士は、此に至りて更に其信仰の幾等を進め、遂に尊崇すべき偉人と爲すに至りたり、現に奥山地方の善男善女中には、鞍



馬の僧正坊が牛若丸に憑倚せるが如く、奥山の半僧坊が元恭に憑倚せるに非ずやと謂ふものあり、并は兎も角も元恭其人の眞面目大本領は、武に在らずして文に在り、腕力に在らずして胆力に在り。

漂然の出發

其歸朝するや既に突如たり、其歸山せるに至りては最も突如たり、疾風の如く去來するは、是れ元恭の本色なり、左れば遠州一帯の人士は、氏に非常の尊敬と親愛とを加へ、方廣寺一山の衆徒は固より、未寺の僧侶に至るまで、方丈たる東明和上、新たに遷化して、秋風落葉を嘆するの時に當り、社會の渴仰彼れが如く、學問智識の該博なると斯の如き、元恭其人を得たるは、

實に百万の援兵を得たるに等しければ、費めて一年、半年なりとも、錫を山門に留めて、布教に盡さんとを求むると、至つて切に、且つ東明和上は方廣寺の後住たらんことを元恭に遺言し。寄命の任も亦重しと雖も元恭は或る目的の爲めに、全力を注がんとことを期し、少くも今より十年間の暇を乞ひ受けたりとて、固く執りて動かさず本年八月十四五日の交を以て、漂然として下山せり、元恭は何故に、爾く急ぎに急ぎて山門を去り、恩師の樞肉未だ冷かならざるに、更に再び雲水の跡を逐へる乎、是れ實に大疑問なり、而して元恭自身が、其方廣寺の僧侶等に語れる所は左の如し、

今回の歸朝に際し、在印度なる師の大僧正は、往復を除き、僅かに一週間の暇を許されしのみなれば、永く滞留する能は



又今より十年の留學を要するの理由は、從來南印度の地方は殆んど巡遊し盡したるも、北印度の地は、足跡未だ一回も之に及ばず、之を踏査し修業せんには、少くも十年の歲月を積むに非ざれば、其目的を遂ぐる能はず。

元恭が海外渡航を急ぐは、印度なる師の坊より得たる。休暇の短き爲めに於て、其久しく外邦に在るを要するは、跋渉の區域廣大にして、且つ交通の不便なる地方に遊ぶが爲めなり、其名義は必ずしも明かならずとせず、然れども是れ果して其真相を盡せるものなるか、曰く否、或る人方廣寺の衆徒に問ふて云ふ、『元恭が將來の目的は何れに在るや、將た之より向ふ所の地點は果して北印度なるや、子が見る所遂に如何』と彼れは答

へて云ふ、『元恭氏の言は大海の如し、吾輩の如きは井底の餅のみ、餅を以て大海を測る、猶蟻にして天牀の運動を測るが如し、豈其正鵠に當るを期すべけんや、若し夫れ向後元恭氏が到處の地は、北印度か。亞弗利加か、吾輩の知り得べき限りに非ざるは、猶彗星の運行を知り得ざるが如し』と、此問答を取りて元恭の分疏する所に對照すれば、其事の大略得て推知すべきなり、又客の遠州に遊ぶものあり、曾て元恭を招請して其所説を聞ける、氣賀町の郡長原某に會して元恭に關する觀察を叩けるに、原氏對へて曰く、『元恭は僧服せる燕趙悲歌の士なり、其口にする所は慈悲忍辱、勇猛精進、の八字に外ならずと雖も、彼れが胸中には、此他尙大なる一物なきを得ざるべし、然れども元恭は能く法衣の袖に隠るゝの人なり、吾輩亦頗る彼れの本領を聞



かんことを試み、屢々問を其方面に向けたるも、彼れは常に吾々如き僧侶の身分にてはと云ひて、一切の問題を法衣の下に避け、絶えて之を説くことを爲さざりし、故に元恭は燕趙悲歌の士たる本領を有して、深く之を包み、却つて毫も悲歌せず、胸臆に悲歌しつゝ、口舌に放笑するの流ならん」と、此評能く元恭其人の本色を活躍せしむるを覺ゆ、故に急遽出發せる理由、及び其何れに向つて出發せるかの點に至りては、決して右に擧げたる、學術探究の事に止まらざるべし、而も其何れに在るやは、今之を明め難し、亦是れ無字の文を讀む底の眼を以て、理解すべき問題なり。

而して元恭は、明治廿九年八月十四五日頃を以て方廣寺を下山し、直ちに東京に出で、外國航行の準備を整へ、同月下旬若くは九月上旬を以て、神戸に向ひ、郵船に搭じて大陸の某地に向へり、其去るや、飄然として風の如し、今將た何れの地に在りて、何事を経營しつゝありや、只た之を將來の或る機會に待つの外なきなり、今之を知るものは、其れ只だ元恭あるのみ、元恭が在外の政友あるのみ。

幼時の元恭

釋元恭が出生の地は、愛知縣下名古屋にして、同市傳馬町の商人土屋儀兵衛の子なり、慶應三年七月の出生にして、其幼名を欽三郎と呼べり、人の幼時は、外物の感化を受けざる、先天の素性を、其儘に發揮する時なれば、其人物を極めんと欲せば、先づ其幼時の行狀を、觀察するより宜きは無し、而して元恭亦



普通の小兒の如く、發達し、遊戯し、眠食して、人と成りしと云ふに過ぎざれども、幼時の行狀中、殊に注目すべき點も亦少しと爲さず、今左に其重なるものを擧ぐべし。

普通の小童は、多少軍人的の氣象を幼時に顯はさるること無きは、猶ほ普通の少女が、多少人の母たるの氣象を示さるること無きが如し、是れ皆な、男性と女性とを區別する。先天的の標識なる故、元恭のみ幼時に於て、尙武の氣象に富みし證據とは爲すべからざるも、元恭の欽三郎は、取り別けて尙武の氣象を具へ、他の小童が普通に愛するよりも、強き度を以て、痛く刀劍類の玩具と、奮闘血戰の狀を畫ける、武者繪類とを好み、時尙維新章創の際に屬して、戦後の人氣、尙荒びたる時なりとは云へ、四民の區別は、頗る判明にして、父の位地が商人たりし

にも拘らず、玩具の刀劍類を佩しては、得々として喜色を顯はし。武者繪を熟視しては、煩はしき迄人に説明を求め、其れにも嫌らで、繰り返しく之を眺め、好める遊戯さへ、打ち捨つる等の事少からず、今に至りて、文學の外武藝を以てしても、亦其名を成せる素質は、此時既に元恭が、腦底に宿り居りしを知るべし、又元恭は、其競争心非常に強く、尙も負くるを欲せず。時としては、力に及ばざる、年長者を相手にして、之と戦ふことを辭せず、戦はば必ず勝つことを期する爲め、愈々其力に餘りて敵せざる時は、悔みて止まず、遂に何等かの手段を見付け出して、之に報復を試むることあり、斯くして一勝を得るときは、大に其神氣を慰め得たるもの如く、快然として喜色其面に溢れたりと云ふ、是れ亦元恭が腦底に宿れる、競争心



の豊富なることを、證するの事實なり、元恭が出生の地は、豊太閤の起りたる尾州にして、坊間の談柄にも、豊公の逸事多く、小童は其話に感化さるゝこと、少からざることなるが、元恭は別けて大閤の偉功に心酔し、豊公の繪を見ることを好み、其物語を聞くことを好みたる末、遂に豊公を以て、自ら期し、自ら居るに至りたり、左れば豊公は、元恭の幼少なる頭腦に、大なる理想を生み着けたるもの、如く、其年輩の相應なるを以て、日吉丸時代の豊公は、元恭が好みて之に擬したる處にして、常往坐臥、皆な繪に見たる日吉丸を摸し、豊公幼時の身振を氣取りたりと云ふ、此心能く今日あるを、致したる原因にして、所謂三才見の魂、百途もの里に、適中するものと爲すべきなり、元恭は又た、何等かの目的を達するが爲めには、非常の強

情を張りたり、例へば欲しと思ふものを、與へよと求めて、之を與へざるときは、號泣して、止まず。父母も遂には持て餘して、之を與ふるに及びては、驟雨一過して天地忽ち青きが如く、餘念もなく獲物を携へて遊べりと云ふ、或るものに熱中する場合には、假令竹馬の親友等が、出遊を勧むるとも、元恭は斷然拒絕して之に應ぜず、獨り汲々として其爲さんと欲する所を爲せり、故に時としては離群索居して、終日家に在りしことも少からずと云ふ、又今迄何かの玩具を携へて、嬉遊し居りしかと思へば、忽然之を捨て、端然靜座し、何を考へ居るにや、潜心工風するもの、如く、黙々たるもの、多時に及ぶことあり、其状恰も正念の眼を半開半閉して、結伽趺座するが如く、奇異なる習癖ありしと云ふ、元恭は又、非常に熱心して、父母より



乞ひ得たる玩具にても。友童の乞ふことあれば、快く之を與へて毫も之に執着せざることあり、又珍らしき玩具にても、見付け出さば、之を得んと欲する事極めて切にして、之を得ずんば止まず、其外物に對するや、時としては熱すること火の如く、時としては冷かなること水の如く、熱するときは、徹底する迄熱すると共に、徹底すれば亦た直ちに他に移り、極めて變轉酒脱の趣きを備へたり是等の特質は、能く今日の元恭其人が、境遇に相應すと謂ふべし。

幼時の修學

元恭の父祖は、名古屋市に在りて、商業に従事せしことは、前にも記せしが、今元恭が家庭に在りて、如何なる教育を受けし

やの、有様を推する爲め、更に元恭が家庭の一斑を擧げんに、元恭の父土屋儀兵衛は、名古屋なる傳馬町二丁目に在りて、砂糖商を業としたり、然るに儀兵衛は、當時の商業界に在りては、一廉の活眼家と思敷、安政の初年頃、即ち明治維新の年代を去ること十餘年の以前よりして、横濱の外國人居留地に出入し、同所より砂糖を取引して之を名古屋に輸入し、販賣し始めたる事にして、洋糖を名古屋に輸入せしは儀兵衛が其率先者なりしと謂ふ、安政の年代は、全國一般、外人を目して。洋夷と爲したる、舊夢の覺めざりし時代にして、居留地附近の商人と雖も、之に近づくことを敢てせざりし有様なるに、尾州よりして、遙るく横濱に着目し、商品を利用したりしは、其着眼既に凡流を抜くこと、幾等の高きに在りしを知るべし、而して元恭の母



タカ子と云へるは、頗る敏捷の人なりしと云へば、亦此瀾眼家の好配偶たりしなるべく、随つて此父母の膝下に人と爲りたる、元恭は、知らず識らざるの間に、時流の見聞以外多少外國と云へる新觀念を、冥々の間に注入されしなるべし、左れば元恭が今日四方の志を起して、世界を小なりとするの氣識あるもの、亦其家庭に於る素養其幾分の原因を爲せしならん。

儀兵衛の眼識は、前項に記する事實にて、略ぼ其大體を推知し得べきが、之と同時に其子弟に對する、教育に就ての考へも、亦俗流に異なりたるものありしと思敷、商賈往來、名頭の手習、珠算の發古、又は普通小學の科目を以て、商家教育の能事了はれりと爲したる、普通の考に反し、名古屋の市隱にして、關源香と云へる學者の門に、元恭を入學せしめ四書、五經、文選等

の漢書を習讀せしめたり、是れ一は、元恭が、學才の衆童子に勝れて、敏活なりしと、他の一は、元恭が學問の嗜好深くして、齟齬たる世事に拘らざりし、本人の天質にも由るべしと雖も、子弟其志あるも、父兄は商家に在りて餘計な事なりと叱正し、子弟篤學の志を抑壓して、強て自己の模型内に當て符めんとするが、尋常の商家に在る習ひなるに、儀兵衛が安んじて。元恭に是等の科目を授けたるは、大に時流の所見と違へる一點なり、而して此漢書の習讀も、亦元恭が今日の大飛躍に對して、若干の素因と爲りしことは、疑ふべくもあらざる事實なり。

儀兵衛が凡流以外に、或る眼識を有せしことは、前記する通りなるが、左り連儀兵衛は、始めよりして、元恭の今日あるを先見し、之を佛門の一巨人に仕立てんと、期したるには非ず、成



程後年に至りてこそ、儀兵衛も元恭を出家せしめられたれ、其始めは飽くまで之を商人に仕立てんと欲したるや、疑ふべからず、此は元恭に録三郎と云ふの名を、付けたるにても知るべし、此幼名は、元恭の將來を祝して、金を太く多く儲けしめんとの考へより、殆んど思ひ半分に命名したる譯にして、世間に稀れなる名字なるが、遣は實に儀兵衛が右の如き意味より、自身に發明し創意して、付したる名字なりしなり、左れば儀兵衛は、商業を以て元恭の立身せんことを豫期し、想望したりしが、本人の嗜好は此に在らずして彼れに在りたると、土屋家の遺法に、奇異なる習慣ありしとの理由に依り、遂に元恭を佛門に入れたるが、元恭は世間の金こそ、太く儲けざれ、出世間の金に至りては、生年僅かに廿九才の今日に於て、既に大に之を儲け、將

來尙は大に之を儲けんとしつゝあり、元恭が十三才の折に、不幸逝去したる儀兵衛は、地下より元恭が今日の成人を見て、羞引其得失なきを看破し、其兒の發達に莞爾として微笑するならん、前に記述したる、元恭の特質を見るも、元恭が尋常の兒童に非ざりしことを知り得べきことなるが、其頭腦の靈慧澄徹したることは、誠に著しきものあり、殊に其學才に至りては、所謂一を開きて十を知るの明を具へ、漢書其他典籍の句讀の如きも、一たび之を授くるときは忽ちにして通曉し、師の授讀一過すれば、再び之を質すこと無く、直ちに之を復讀して、毫も誤まること無く、強て刻苦研究せざるも、天成の頭腦は、直ちに之を腦裡に刻印し、其復讀の、只だ一回か二回なるに過ぎざるを危ぶみて、之を試験するに、毫も凝滞すること無き、強記



元恭佛門に入る

の力に至りては師たる人も、殆んど嘆稱の外なかりしと云ふ。」

元恭は十二歳迄、整肅なる家庭の内に成長せり、此時迄は、元恭自身にも出家の覺悟ありしに非ず、父たる儀兵衛も、亦元恭を僧とするの考へありしに非ず、只だ元恭は其勇氣、剛腸、智慮、學才、孝心等に於て頗る他の兒童に異なりたる特質を顯はせるに過ぎず、本人は尙ほ十二才の幼童なれば、出世間の大覺悟を定め、大精進の勇猛心を、振ひ起すの時にも達せず、尋常の兒童の如き、動作せしに過ぎざりしが不幸なる事變は、元恭を驅りて、佛門に入らしむるの時機を作りたり、此時若し此事變無かりせば、元恭は果して佛門に入りたるや、否や、未だ知るべ

からず、將た今日の學藝を修め、今日の事業を立てしや否やも、亦未だ知るべからざりしなり、然るに此事變の爲めに、氏は遂に出家することゝ爲り、今日に至るまでの境遇を此時に定むることゝ爲れり所謂不幸なる事變とは何をか謂ふ、元恭が祖父たる土屋逸齋の逝去せしこと是れなり、祖父の逝去は、何故に孫の出家を促がすの原因と爲りし乎、是れに付ては、土屋家の珍らしき家風を説明せざる可からず、日本の古代には、殉死の風習ありしは、昔人の知る所にして、野見宿禰が、人形の偶像を發明して、生ける人類の代りに、之を埋むるの工風を爲せしは、有名の咄なるが、其れと是れとは多少事變れど元恭が實家たる土屋家にては、先祖代々遵守し來りたる、殉僧の家風あり、殉僧とは、奇異なる名稱なれど、約めて謂はば、先づ斯く名づ



くるの外無かるべし、即ち祖父の死去するときは、孫を出家せしめて、其後世の菩提を吊はしむること、是れなり、是れ所謂一人出家すれば、九族天に生るの信仰より、來りし風習なるべけれど、亦幾分か其系統を、殆死の古風に引ける廉もあるべし、兎に角に土屋氏の家例として、此奇異なる風習の儼存するを以て、逆齋の死に對し孫の一人を出家せしめざるべからず、而して元恭には、弟妹二人ありしが、父なる儀兵衛は元恭を選み、出家の運命は、遂に元恭の頭上に落ちたる結果。今日の元恭其人を、作り出すの地歩を爲しぬ。

元恭が佛門に入りたる、事歴を案ずるに、尾州の社會に於る、佛門の勢力も、亦助けて、氏を佛門に入るの一原因と爲りしに相違無し、本邦中殊に佛門に對する信仰厚く、僧侶と云へる

一階級を以て榮譽あり、幸福ありと爲すの地方は、先づ豊後と尾州とを推すとなり、蓋し其道の通論ならん、現今臨濟宗の管長として、有名の大徳たる、關無學老師の如きは、久しく尾州大山なる、瑞泉寺に在りて。不二の法門を開き、信徒に與へたる感化の力も、亦極めて大なるものあり、其他有徳の高僧にして、教化の力を尾州に盡せしこと少からず、社會一般に佛門に歸依し、僧侶を重んずること、亦他に超ゆるを以て、出家の一事を目して、人生に遠ざかるものと爲さず、否な寧ろ齟齬たる俗社會よりは、一步超越して一段上位に就くものと、解するの風習あるを以て、父なる儀兵衛も、元恭を割愛して、敢て吝まらず、而して元恭も亦、牙籌を把りて錫鉢の利を争ふよりは、其特性に於て、寧ろ閑雲野鶴に伴ひ、入界の水平線上に大踏歩す



るを、快く感ぜしなるべく、且つ細かに觀察するときは、氏が學に篤きの特長と、小供心に豊太間の幼時に私淑したる、自信の念とは、相依り相待ちて、太閤亦會て佛門に入れり、位の理想を、幼なき腦底に宿せしなるべく彼れ是れ相待ちて、元恭は遂に佛門に入ることゝ爲り、且つ其入門を目して、寧ろ愉快の事と爲しつゝ、進みて之に入るに至れるならん。

右の如き諸種の事情は、元恭が出家の運命を定めたり、而して元恭は祖父逸齋の死亡せる年即ち明治十一年に於て、其三月一日と云ふ日を選びて、遠州引佐郡奥山なる、方廣寺の門に入り、即日剃髮得度したり、是れ實に元恭が十二才の春にして、精密に數ふれば十才と九ヶ月の幼時にてありき、斯くて其年の六月を以て始めて僧侶の名を付し、元恭と命名せり、蓋し元恭とは、

方廣寺の開山たる、元選禪師の「元」と、土屋家の祖先たる、源良恭の「恭」とを、取りて斯は名付しなり。

因に云ふ、本書殉僧の奇風は、元恭氏が、余に贈れる返章に依り、之を知ることを得たるが、去るにても、弟あり、妹あるに、長男たる元恭氏を、出家せしめしは何故なるや、余は之を怪みて、遂に其解説を得ざりしが、後に尾州に行はるゝ風習を聞き、豁然として頓悟せり、尾州には古來一種の信仰あり、即ち七月生れのもの、十月に胎内に宿るものなれば、恰も神無月(十月)に生氣を受け、坊主月(千闍益の節なる七月)に生れ出づる譯にして、斯かる生れものは、俗界に處しては好運ならず、と云ふの信仰にして、男子は僧とし、女兒と雖も尙尼とさるゝの運命を免れず、是れ尾州に行はる



る格言原則なりと云ふ、元恭氏は前にも記せし如く、慶應三年七月の生れなれば、風習上出家すべき資格ある人なり、是れ其長男なるにも拘らず、出で、佛門に入れられたる所以なるべし。(編者誌す)

奥山の方廣寺

元恭が佛門に入りて、始めて得度したる、遠州奥山の方廣寺と云へるは、東海道濱松驛の、北々微西に方れる山中にあり、濱松驛より西北に向ひて、三方原の廣原を貫き、老幹稚枝參差として茂生する、松林の間を穿ちつゝ、一條の坦道に車を驅れば、凡そ二里餘にして、道は左右に岐れ、左を取れば、二里にして氣賀町に出で、右に進めば亦た二里餘にして金指町に出で、何

れよりするも、奥山に至るの道程、等しく二里を數ふ、此二條の道路は、共に起伏せる山間の隘路を上下して、或は路間の田畔に出で、或は山腰の急阪を攀ぢ、道路險なりと雖も、眺望轉瞬の間に變化し、亦以て神氣を慰するに足れり、遂に進みて最後の急阪を登り盡せば、東山の腰部を切開して平地を作り、西山と相對して、一豁を畫せる間に、數十戸の人家を見る、是れ方廣寺門前の、客舎、雜貨店の在る所にして、奥山村の一部に屬せり、之より急阪を登ると、五町にして方廣寺の本堂に達す、寺背の山を攀ぢて、其最高峰を占領すれば、駿遠三の江山は、近く双峰の間に集まり、波名の湖は小鏡の如く、太平洋は大鏡の如く、今切の邊りに架せる、全國無比の長橋は、虹の如く、之と併行して、東向き西行する涼車は、恰も蝶翅にして、煙を



吐くもの、如く、其景致の雄大にして、其氣象の万千する、畫  
 圖も亦及はず、而して地は幽遠高峻にして俗界を抜くこと遠く、  
 實に眞如の月に對して丹田を鍊り、不動の山に面して、無我の  
 眞念を發揮するに足るの靈地たり、此絶妙の地を相して、大法  
 輪を轉じたる、開山の祖師を誰とかなす、實に是れ人皇九十五  
 代、後醍醐天皇第十一の皇子、普應聖鑑國師無文元選大和尚に  
 して、遠く錫を元國に駐め、苦學十數年、業を修めて歸り、今  
 を去ると五百十四年の昔、元中元年を以て始めて本寺を開かれ  
 し以來、法徳照々今に至りて衰へず、深く民人の信仰を維ぎ、  
 臨濟宗南禪寺派の中本山にして、六派三百六十ヶの末寺を統べ、  
 駿遠參地方に於ける信仰の中心たり、方廣寺の開山は、斯の如  
 き大徳なるのみならず、寺傳に依れば、開祖聖鑑國師の入山せ

られたる節、半僧坊權現、國師を奉迎し、弟子の數に加つられ  
 んことを乞ひし折、國師は汝所能あらば、之を現はせと宣示し  
 給ひしに、師若し教化の乞を許し給はば、盡未來際、此山を守  
 護せんと答へしより、師は汝半ば僧に似たりと、打ち笑まれし  
 かば、半僧坊は大に喜悅して、國師に隨身し、自ら半僧と呼び  
 しとなん、世俗は今に至るまで、秋葉山の三尺坊、奥山の半僧  
 坊と併稱し、其威徳を畏敬し居れり、斯の如く聖鑑國師の高徳  
 と、半僧坊の威靈とは、相待ちて奥山の神聖を維持し、信徒の  
 渴仰すること、愈よ盛んにして、方廣寺は龍の如く、半僧坊は  
 雲の如く、相須つて慈光の全璧を完うせり。  
 元恭にして、其始め師佛するに當り、若し他宗及び他の寺院を  
 選みしとせば、今日の境遇に至れるや否やは、未だ容易に知る



べからざるものあり、蓋し本寺は禪宗の教義を執り、且つ元選國師の開基に係り、抑も禪宗は由來不立文字を本尊とし、專念の工夫は只だ練胆の一事に在り、故に其藏るゝや、冷々死灰の如しと雖も、其行くや生死の外に立ち、猛火の枯原を焚くか如きの概あり、之を以て禪宗は古より、豪傑の士を出すこと多し、且つ開祖國師は、金枝玉葉の貴きを以てして、六百年前の古代に於て、遠く異域を踏破し、大勇の遺教を後昆に垂れ給ひたり、胆を此宗義に練り、經を此國師の尊前に講ず、靈化の餘徳、自然に天地を小とするの識量を増すべし、元恭豈特に本寺に感化されざらんや、元恭の本寺に入りしは、實に其性に適するものと謂ふべし、彼れが今日ある、亦本寺に負ふ所多からん、而して彼れが本寺に入りしは、誠に簡單なる理由に出たり、元

來彼の老師今井東明和尚は、尾州の産にして、其聞え尾州に高きと、殊に元恭の親戚に、田中某なる眼科醫あり、此人東明師と非常の親交ありしに依り、元恭が師佛の好地を選定し、之を方廣寺に入れたるなり、只だ此事由の爲め、此魚は彼の水を得たりしなり。

俊敏の雛僧

元恭は奥山村の方廣寺に在りて、佛學を修むるの傍ら、同村の小學校に入りて、普通學をも修めたり、然るに其學才抜群にして、常に校中の生徒を凌ぎ、寺中に於る梵經の進歩も、亦甚だ迅速にして、一たび教へを受ければ、直ちに之を了解し、復た遺忘するが如きとあらず、左れば元恭を引受けたる、東明和尚



の眷顧も亦厚く、山門外の信徒も、大に元恭を愛敬し、英氣あり且つ敏才ある小坊様として、寺の内外に、一異彩を放ちたる事實は、奥山近傍の里人、今も尙盛んに唱道し居れり、元恭が小學校の同窓なる某の、語る所に依れば、元恭は必ずしも刻苦勉勵せず、天賦の靈慧なる頭腦は、特に強肥の力に富み、小學校の如きは、別に勉むる所無くして、常に校中の第一位を占め、他生能く之と拮抗するもの無かりしと云ふ、然れども元恭は、短き時間に、多くの學問を爲さんことを勉め、決して時間を空費せしこと無し、故に元恭は其學業の、進歩迅速ならんこと願ひ、威神力の冥加を仰がんと欲して、半僧坊大権現へ祈願せるとあり、里人の語る所に依れば、山門の衆徒弟は、休課の時刻に至れば、奥山の町家に出で、村人を相手に遊戯するもの少か

らず、殆んど一山の風を爲せしが、元恭のみは決して之に習はず、町家を通行するに當りて、里人等は、時々之に遊戯を勧めしことあるも、「己れは忙がし」と答へて、毎に之に應ぜず、急ぎ己れが學房に歸りて、學科の習讀に餘念なかりしと云ふ、元恭が歸佛の翌年、即ち明治十二年に於て、其實父儀兵衛の永眠するに逢ひぬ、時正に元恭が十三歳の齡を積みたれば、既に人生の吉凶を辨じ、且つ特に孝心の深き少年なりしを以て、非常の愁歎に陥たりしが、其れより後一年を経て、學を四方に求めんことを志し、東明和尚に乞ふて、其許諾を受け、明治十三年九月、即ち十四歳の秋を以て、方廣寺を下り、遠州山崎村なる安寧寺に入りたり、明治十一年三月方廣寺に入りしより、此に滿二ヶ年半を方廣寺中に送りしなり、安寧寺に於ては、住



職資源和尙に就て、佛學を修め、亦非常の勉強と、哲發とを以て、業を勵み、大に得る所あり、同寺に留ると一年八ヶ月、即ち明治十五年三月鳥福ひ花笑ふの頃、十六歳の春を以て、同寺を辭し、諸國行脚を企てたり、素より超然脱俗の人にして、加ふるに雲水の身となりたる元恭は、千山萬水唯其跋涉するに任すべきも、元恭の目的は、學業にありて、風月の勝を探るに在らず、此處彼處と、該博知名の職者を尋ねて、道を問ひ、竟に美濃國方縣郡岩崎村靈照院に設立せる、佛敎専門學校を以て、留學の地と定め、明治十五年九月を以て、同校に入學せり、流石は一宗の専門學校ありて、敎科も能く整頓しつゝありしが、元恭は、一歩一進、隊を追ふて入り群に從つて出で、碌々凡々尋常の科程を修むるの遅緩なるを思ひ、師に乞ひて、二學年分

を一時に修め、通常人に二倍する科程、即ち通常人の五ヶ年にして終了すべき科目を、二ヶ年半にて修め得たりと云ふ、其頭腦の明瞭なる、亦以て其全軀を類推すべきなり、而して元恭は斯く一時に、通常人に二倍する科程を、修學しつゝあるにも拘らず、同校には年二季に、二ヶ月の休暇あるを幸ひとし、故郷名古屋の市隱なる、沖津殿と呼べる漢儒に就き、傍ら陽明學を研究せり、先生は元恭が勉學に熱心なるを嘉し、氏に對しては、特に親切に敎訓を垂れ、元恭も亦天質の靈敏を以て、短時日間に於て、能く其學問の要領に通ずるに至りたれば、先生の氏を愛すると亦他生に超え、明治十七年六月二日、溘然として病没するに當り、元恭を枕頭に呼びて、後事を托し、且つ「御身は余が陽明學の學統を繼承せる人なり、余が代々の家名も、亦余



が家の爲めに、相續されたりと云ふ、元恭は明治十八年三月まで、佛教専門學校に在りしが、學藝の進歩著しく、最早同校より、道を求むべきものなきを以て、更に深遠大成の志を立て、在學二年七ヶ月にして、同校を辭し、再び雲水の身となれり。

渡清の志望

元恭の天眞は、之を幼時の特質に依りて、表示せらる、元恭は實に、功名心に富み、冒險心に富み、好奇心に富み、獨立心に富み、之に加ふるに、剛情不屈の精神と、尙武の氣象とを以てせり、故に情火一たび中に熱するときは、俗中の大俗と雖も、及ぶ能はざるの執着心あると同時に、一旦意思の轉換するとき

は、哲中の至哲と雖も、尙斷念し難き、一切の弊累を擺脫するの勇氣あり、其漂然として方廣寺を辭し、漂然として靈照院を出で、以て雲水の跡を追へるもの、亦其爲人を見るに足れり、左れば元恭が、當時に於て儒佛の學に期せし所の目的は、最高の頂點を極め、最奥の源義を究め、最大知識として、佛門に立つにあり、元恭は此目的を洞徹するが爲めには、水火の難をも辭せざるの決心あり、此決心を遂行するか爲めには、故郷も閩門も、冷然之を辭するの氣力あり、青山碧水、物として、之に愛着するとなし、元恭は此目的を抱きて、靈照院の佛教専門學校を去れり、去つて道を四方に求めり、然れども元恭が期待する、儒佛兩道の蘊奥を究め、之が知識の最高點を占むる事は、遂に之を我國内に、求むべからざるを發見せり、是れ元恭が垂



天の羽翼を張り、万里の波濤を開拓せんとの、雄心を勃興せる、一源因となれり、蓋し今日の元恭は、其眼界に蔽ひる所、多種多端、博弘雄大にして、當時の如く狹隘ならず、随つて今日の元恭が志望は、畢竟何れの點に在るやは、未だ俄かに、之を隠度すべからずと雖も、當時の元恭は、假令其志を、支那海の西、亞細亞の大陸に馳せしとするも、其見聞する所の區域は、日本社會の一部門たる、宗教社會の一小區域に過ぎざるが故、其海外遊學の事を思ひ立ちたる所以も、主として宗教的學問の一事に在りしが如し、元恭は、道を日本國內に求めたりと雖も、其先輩、及び師匠とする所の人は、千年前に傳來せる、唐譯の佛經と、我國翻刻の儒書を授くるに過ぎず、是れ猶通事を介し、辛くして異邦人の意志を汲むが如し、最奥の淵原を探討せんと、

欲するものより見れば、隔靴搔痒の憾あるは論無きの事たり、元恭は此に於てか、大胆なる志望を起し、儒道を清國の遺賢に求め、佛教を印度の活菩薩に受け、一舉して、兩道の醍醐味を嘗め盡さんと熱望せり、是れ實に元恭が、悠然万里の坤輿を、踏破するに至れる所以の初歩にして、今日の元恭其人を造り出せる、最初の基礎たりしなり、元恭は又詩學を嗜めり、曾て岐阜の靈照院に在るや、唐の王仲初が當窓緘の詩を誦し、薄命なる貧家の小女が、富家に役せられ、終日營々として機を織るも、身には一領の襪を纏ひ得るに過ぎず、窓を隔て、前面の青樓を望めば、娼婦の綺羅燦爛たるを見る、翠帳紅圍の裡、一舉一投の勢を執るなくして錦衣筐に滿つるの境遇を羨望するの狀を畫き、社會の極致を穿てるに感じ、方今海内の詩壇誰か能く



此品藻あらんとて、深く支那文學に推服し、益々支那海を渡るの念を堅からしめりと云ふ。

元恭は明治十八年三月、美濃の靈照院を辭し、錫を四方に飛ばして、師を求めつゝ、海外に雄飛するの大志を起せり、而して明治廿年、元恭が遊學の念、愈々切なる頃に至りては、囊底を探りて、僅かに一枚の天保錢と、二枚の文久錢とを得たり、清國にして若し我と土域を接せば、山臥野宿索より經驗の有るあり、毫も苦難とするに足らずと雖も、唯奈せん、二枚の文久と一枚の天保とは、能く數百里程の航路費を辨じ得べきに非ず、壯心轉た四百州の山河に馳せて、身は徒らに近畿掌大の壺中に在り、時恰も平素の苦學に伴ふ不誕生は、元恭をして肺疾を憂へしむるに至れり、元恭は先づ之を治療せんと欲して、彼の文

久と天保とを偕伴とし、道を紀州に轉じて和歌の浦に向へり、時維明治廿年四月、昭光熙々たる陽春にして、正に元恭が十九年十月の春なり、斯くて元恭は和歌の浦の明媚なる風光と、和煦なる氣候とに其身心を洗滌して、神を養ひ病を治しつゝある間に、偶々一人の清國人が、遊觀行樂して此處に滯留せると聞き、清國渡航の念に切なる元恭は、其狀況を聞かばやどの念慮より、彼の清國人の旅舎を叩きたるに、其人は快く氏を延見したり、打ち見れば年輩既に耳順を超え、仙骨童顏威容堂々として風采凡ならず、其人久しく日本に來り居りしものと見え、巧みに日本語を練りて、滑舌自應對澁らず、其狀を案するに、官吏にあらず、商估にあらず、隱士にあらず、事業家にもあらず、總て何物にも非ざる内に、只た胸中異常の壯圖を抱ける、



傑物なりとの事は、天質機敏なる元恭が、對談の間に早くも之を看破し得たり、彼れ若し元恭が揣摩の明に自かざんば、元恭は斷じて之が推接を受けざる可らず、此に於て乎、元恭は、先づ文字を以て彼れを動かし彼れを試みんと欲し、舒ろに詩格を問ひて、其教を乞へり、知らず、此奇遇は遂に何等の結果をか廣らせる。

異人元恭を試む

元恭は、彼の清國人を相して、非凡の人物と爲し、心中頗る之を敬する所ありしかば、先生に對するの禮を以て、詩格の教へを請ひしに、彼の異人は、莞爾と笑ひて、先づ試みに、一時を賦せられよと答へ、取敢ず、卓上の盃を取りて、之を元恭に侑

り、『酒』と云ふ韻字を、初韻に用ゐ、『夏日村居』の題を以て、即席に一時を賦すべしと云ひぬ、元恭は苦吟の暇も無く、直ちに筆を把りて、

掃愁玉帶銀瓶酒、

避暑晶簾珠池柳、

蝶舞紫雲藤一條、

蜂飛白雪梨三圃、

と詠じ出でたるに、異人は熟ら之を視て、毫も可否を説かず、背後の楣間に懸けたる、額面を顧み、之を指して云ふ様、『是れは雨後山水の畫なり、之を題として今一首を賦せよ』と、元恭は言下に筆を把りて、

蒼龍臥嶽雲猶宿、

路枕清流一界開、

愛水愛山仁且智、

舟人勿侮恐高才、

と書き付くれば、異人は更に他の額面を指し、其額面の文字『雲



月香影」の四字を、毎句の首字と爲して、今一時を物せよと命  
じければ、元恭は聲に應じて筆を走らし、

雲連、雲斷、雲千里、 月出、月流、月一天、

香泛、香消、梅下室、 影來、影去、柳頭船、

と打ち吟じ、從容として些も窮する色無し、異人は此に至りて、  
大に之を奇とするの樹見えしが、更に一題を課し、「春夏秋冬」  
の四字を、毎句の首字と爲し、一時を賦すべしと云ひけり、因  
て元恭は直ちに筆を執らんとせしに、異人は突然、「待て」と云  
ひつゝ、課題の趣きを換へ、「對句の首字に、春夏秋冬の四字を  
用ゐて、一律を賦せよ」と述べたりける、元恭は、之を聞くと  
等しく、一考の暇も無く、

綠水青山求好景、 一年落魄沒風烟、

春歌、柳界和歌浦、 夏嘯、雲間高野天、

秋賦、清流那知瀑、 冬吟、寒月粉川嶺、

紀州佳境漫遊盡、 更訪、姑蘇赤壁邊、

と筆して、此に始めて自己の希望を言ひ出し、微かに渡清の大  
志あることを洩らしたり、斯くて彼の異人の氣色を窺ひ見るに、  
異人は解するが如く、解せざるが如く、隠れに筆を把りて、旅  
僧の狀を畫き、之を題として、一時を賦せよと云ふ、元恭は、  
此に至りて、大に胸底の磊塊を吐く的好機を得たれば、元氣益  
々充實し、筆端愈々窘束せず、

氣雄、富岳千秋雪、 眼豁、琵琶湖萬重霞、

一錫一衣天地廣、 青山綠水是我家、

と一氣の下に呵成しつゝ、 神州の快丈夫、氣品高くして胸宇廣



し、滿漢四百州、兩球五大洋、收めて掌上に弄するの意あるを  
 示し、願賜の間、深く其用を爲さんとするの意あるを諷したり、  
 而も異人は、未だ容易に元恭に許さず、更に一題を課し、「雲」  
 の一韻徹底にて、一首を賦せよと云ふ、元恭は神來の興に乗じ  
 て、

世事紛々都若雲、一身亦是似浮雲、

醉眠南海孤峯月、醒睡關東萬里雲、

と放吟しければ、異人も亦共に興に乗じて、廉維が徳山莊の圖  
 を作り、之に題せよと求めければ、元恭は心得たりと、筆を下  
 して、

亂世英雄不憶鄉、太平君子幸容堂、

龍松虎石天然物、明月清風無盡藏、

と擲ぐり付けたり、是に於てか、異人は益々元恭の才氣に服し  
 たるが如く、尙も其奇を吐かしめんとてや、更に述懐の句を得  
 んどて、之を需めぬ、元恭は此に至りて少しも躊躇せず、直ち  
 に筆を走りして、

兩歲臥山小天地、一朝航海大乾坤、

精神不碍三千界、法事何妨八萬門、

と書し、超然として天地を小とするの識量を寫し出だせしが、  
 異人が展べたる紙面には、猶若干の餘白ありしかば、今は異人  
 の辭を待つに暇あらず、復隱約の間に、自己の志望を暗示する  
 か如き、紆回手段を取らず、一直線に異人に告ぐるに、隨航の  
 志願を以てし、

富貴任天貧豈憂、死生有命壽何求、



離僧幸得隨夫子、鐵鑄驅々試遠遊、  
 と、切に渡清の途上に携へ行かんことを求めり、異人は此要望  
 に對して、何と答へたるぞ、元恭との間に、如何なる約束を爲  
 し遂げたるぞ、其詳密なる消息は、今之を知るに由無し、然れ  
 ども其交渉の大意は得て知るべし、蓋し元恭が是等の詩賦は、  
 假し非常の絶唱とす可きものに非ずとするも、其矢の如く簇り  
 來る問題を、事どもせず、右に左に、自在に應答して、毫も挫  
 まず、揮灑縱橫、一題に逢ふ毎に、英氣愈々加はり、一氣呵成  
 する詩句の間には、毎章才氣の煥發するものあると共に、佛門  
 に在りて、安心の修業を積める身程ありて、何處と無く凡俗を  
 脱し、一種清高の氣韻を洩らすあり、異人は確かに元恭が器識  
 の非凡なるを認めたること疑ひなし、即ち之を換言すれば、元

恭は、異人の傑したる、詩の試験に及第したるなり、之より後、  
 異人は果して、元恭の請を容れたる乎、異人の我國より得んと  
 期する所は、素と元恭の如き圓頂黒衣の者流に非ずして、他の  
 社會に在りしなり、然れども元恭は、渡頭人絶ゆるの時に際し、  
 空しく此千載にして始めて、一遇すべき一大舟師を逃がすべき  
 に非ず、而して異人が人を相するの明は、此時既に元恭が、一  
 個の奇傑たる稟質を備ふることを看取したるならんも、當時の  
 元恭は、尙是れ丁年未滿の離僧たり、之を異人の藥籠に收めて、  
 大に之を用ゐんとするには、更に之を養成するの勞を積み、且  
 つ其將來の發達を待たざる可からず、故に異人の利害よりする  
 時は、未だ遠に元恭を必要とするの事情無かりしなり、然れど  
 も異人の宏量と、元恭が才略とは、竟に兩個の關係を全うし、



終生相信賴すべき、不思議の天縁を繋ぎたり。

哥老會頭呂氏嘉祥

元恭が一見其人に服し、而して其人亦能く元恭を容れ、殆ど全く今日の元恭を玉成したる、彼の清國人は果して何者ぞ、元恭は深く此人の名を公表するを忌めり、然るに清國の新聞紙、一たび哥老會長其人の名を傳へてより、其名は元恭の名と相因縁して、我日本にも喧傳するに至りしが元恭が和歌の浦に邂逅したる異人こそは、實に此哥老會頭其人にして、姓は呂氏、名を嘉祥と呼べり、呂氏は實に、彼の滿清の粟を食むを屑しとせずして、異日風雲の機に會せは、大に漢族人種の爲めに、一大氣袋を吐かんとす、秘密政社、哥老會の頭領たり、呂氏が率ゐ

る所の、哥老會なる秘密團體は、三百年の久しき歴史を有し、鞏固なる根柢を有し、夥しき黨員を有し、嚴密なる規律を有し、且つ巨額の資産を蓄へ、陰然清國政府の一敵國として、清國の廣野に蟠屈するものにして、之が首領たる呂氏の如きは、其識、其學、其才、其能、共に滔々たる清國人民の多數に卓立し、清國に於ては一種特異の人物たるは勿論、足跡の及ぶ所亦頗る廣くして、當時日本に滯遊せる日子も亦少しとせず、能く日本語に習熟して、應對流るゝが如きは、亦以て其人物と、其用意の尋常ならざるを想見するに足れり、元恭が一見其人物の奇偉なるを看破したるもの、夫れ豈偶然ならんや、而して此哥老會頭呂嘉祥は、何の必要ありて、明治廿年に我邦に來り、飄然として和歌の浦に遊び暮し居たりしぞ、今當時に於ける呂嘉祥の



目的を釋ぬるに、呂氏は實に、其股肱と爲るべき幕僚を、我神州男子中より得て、之を伴ひ返らんことを、志望とせしなり、呂氏は全く斯の志望を懷きて、日本の各地に周遊し、其人を求むるの傍ら、我邦の形勢をも併せて觀察し、其送次和歌の浦に至りて、日本絶景の隨一たる風光を賞し居りしなり、呂嘉祥の目的は實に斯の如し、故に呂氏は、此行必ず、拔群なる政治家と、有數なる劍客とを得て、之を清國に伴ひ還らんと欲し居りしも、其目的たるや、容易に人に打ち明かすべくもあらねば、我國人は、矢張り尋常一様の支那人として、之を目するの外無く、彼れが胸中に十万の鐵騎あるを相し得べき理無し、左れば彼れは彼れの目的を明かし難く、我輩落魄僞の士も、彼れに其本領を示すの機なし、之が爲め呂嘉祥は、殆ど其求むる所の人

物の、得難きに因じ果てたる折しも、元恭は進みて渡清の志あることを述べしなり、元來呂氏が當初の望みは斯の如く、専ら政客及び劍士に在りて、元恭の如き、僧侶には非ざりしも、牛溲馬勃敗鼓の皮も、良醫は收めて良藥とし、雞鳴狗盜も、政治家は用ゐて能臣とす、况して元恭の奇才必ず用ふるに足るべきをや、此に至りて呂嘉祥は、遂に元恭の要請を容るゝことゝは爲りぬ。

此時呂嘉祥と元恭とは、如何なる程度迄、其談話を進めたるか、個中の消息たる、未だ容易に測り知るべからず、呂氏果して、自身が清國に於ける、位置、目的、計畫等に就き、如何程度の秘密を、元恭に告知したるやは、一切不明瞭なれども、思ふに呂氏既に元恭の才學を看破して、之を用ゐんと決したる以上は、



徒に自家の位地を秘すべくもあらざるのみか、呂氏は當時和歌の浦にて、元恭に血判の誓約を求め、元恭が之に應ずるに及びて、共に清國に渡航したる事實ある故、呂氏は其際、必ず秘密の全部若くは要部を、打ち明けたるに相違無く、元恭に至りては、其秘密を聞く等しく、更に愈々之を奇として、其隨航を喜ひしや知るべき也、要するに和歌の浦の奇遇は、殆んど奇遇を以て終始せり、其初め元恭は、修學の爲めに渡清せんと欲し、因て呂嘉祥を動かしたるに、意外にも、呂氏は尋常一般の儒者に非ずして、前途偉大の壯圖を抱ける、清國稀有の傑士たることを發見せり、當時に於ける元恭の歡喜は、知らず果して如何計りなりしぞ、元恭が人と爲りしは、其幼時の經歷にても知らるゝ如く、頗る壯大の事業を悦び、且つ極めて好奇心に富めるを

以て、元恭は到底、香を焚き經を講ずるの方丈に非ず、寧ろ大澤に惡龍を制馭し、深山に猛虎を馴養する、阿羅漢底の快僧たるなり、區々として、儒佛の經を捉らへ、讀經誦句の間に醒醒するよりも、僧俗兩間に跨りて、世を濟ふの業を講ずるは、元恭が稟性に適するの大なるものなり、加ふるに呂氏の期する所は、遠くして追らず、充分勤學の餘暇と其資とを供するの傍ら、其成業の後、呂氏の幕僚として、俱に回瀾の事業を企てんと、云ふに至りては、是れ恰も龍を得て併せて蜀を得、龍虎風雲を呼ぶの好機を博せるもの、青年十九歳にして英氣鬱勃たる、此佛門の獅見が、高僧の快感胸に滿ち、何異諸天觀下界、一徹塵裏闢英雄的の得意、亦以て想望するに堪えたり、而して呂氏亦失望の餘に風雛を得て、之を養ふの快味を覺えたる夫れ幾許ぞ、



和歌の浦の風光は、眞に不思議の人を、不思議の人に紹介せりと謂ふべし。

斯の如くにして兩個の身は、相合して一心と爲れり、呂氏は事の  
 大要を元恭に語りて、更に容を正して云ふ様、「凡そ我哥老會  
 の規約として、苟も之に入會する者は、必ず誓書を出して、背  
 信無きことを盟はしむ、吾子若し予に従はんとなせば、其誓書に  
 調印すべし」と、元恭は之を快諾して、「扱て誓書には、如何な  
 る印を用ふべきや」と問ひければ、呂氏は「清國の法、實印及  
 び他の印なし、誓約は心ず血印を要す」と答へぬ、元恭は瞬時  
 も躊躇せず、聲に應じて、決然座右の小刀を取り、左手の小指  
 を劈けば、朝日に匂ふ山櫻、大和心の赤き鮮血は、淋漓として  
 滴れり、いざとて指を誓書に捺せば、幾十條の規約書は、生き

て躍らんとし、字々皆精神あり、元恭は意氣昂然、呂嘉祥は快  
 然として、靜に之を管底に納めり。

決死の訣別

元恭は鮮血を迸らして、莫逆を呂嘉祥に誓へり、臍を決して紀  
 州の海を望めば、蒼海萬里、洶湧として、怒り且つ時ゆる水平  
 線の西南には、龍々然として際涯無き、一大帝國の横はるあり、  
 世界最古の先進文明國にして、自らは中華を以て誇るも、今や  
 不幸にして、強弩の未勢、絹綯を穿たざるの衰運に傾きぬ、遽  
 莫、深山大澤必ず尤物の寓する在り、禹域四百州の一大塊、豈  
 文明の師宗たる者を産せざらめやは、此土に就きて、靜に業を  
 研き徳を修め、鐵錐一枚、四方を蹂躪して、親しく豪傑の士に



結び、四億餘衆を教化し利導して、濁世の爲めに清波を擧ぐるを得ば、大丈夫の本懐何物か之に若かむ、眉昂り意激して前途を思へば、爽絶又快絶、五尺の軀幹、化して十六丈金身の巨人たらんとす、人生若し此の境遇に際會せば、懦夫と雖も亦奮起すべし、况んや、英氣彼が如く、器識彼が如く、抱負彼が如く、而して又機智膽略彼が如きの元恭に於てをや、勃然たる猛志は鐵盾も亦之を透すべく、泰山亦決して之を壓ふべからず、當時の元恭は、此の時に於て早く既に精神的に今日の元恭と化せるなり、四億衆を併呑する不敵の英物と進歩したるなり、將來の成功亦方に知るべきのみ、ヂスレーリの所謂、英雄と爲らんと欲するは、則ち英雄と爲るの楷樹なりと云へるもの、亦宜なるかな、而して當時の元恭は、斯の如き奇絶快絶の將來を有す

ると同時に、又峻絶危絶の將來を擔へり、身曾て肺疾を患へて、醫療未だ治からず、此病患を身中に藏て、遽然異域に入るわらんか、先づ天候地味の大敵と、血戦するの危険を冒さる可からず、而して能く道の勁敵に打ち勝つとするも、元恭の安全は、未だ容易に保ち得べからざるものあり、何となれば、氏は普通の留學生に非ざして、既に清國在野義黨の一人と爲り、且つ其未來に於ては、之が參謀と爲り、領袖と爲り、天下無二の專制國に縱横して、時に其政府を敵とする、危険を冒さるを得ざるのみならず、學業愈々進めば、責任益々重く、奇絶は危絶と相伴ひ、至快の傍らには至險の横はるればなり、故に若し其絶大なる雄圖と相伴ふ所の、断然たる覺悟無からんか、是れ猶羊豕の牧場に臨むの心得を以て、獅子の巢窟を侵さんとするに



異ならず、泛々たる儔輩は、此に到れば則ち踏阻遂巡して、其利其害果して如何と、計量するの癡態なきを得ず、而も元恭の特性たる、斷然之と相反し、或る獲物を覗ふ場合には、直線的に猛進して、毫も左右を顧みざるの熱心あると同時に、禪門の教化は、元恭をして不動、山の如き、根強き勝負を鍛錬せしめられたれば、彼は斯る時會に際して、其取捨に迷ふ、野狐禪に非ず、轉た前途の行動を喜ぶと共に、堅く心に決する所あり、彼が我邦を發する當時の所置に關しては、殊に録して世に傳ふべきものあり。

元恭は、和歌の浦の奇遇に於て、呂嘉祥に隨ふて、波清するの約を定め、更に呂氏の許諾を得て、一たび方廣寺に還り來れり、想へば、明治十三年の秋を以て、山門を下れる元恭は、殆ど七

年の歳月を行脚に費し、明治二十年四月に及びて、飄然山門に歸りぬ、十三歳の元恭坊は、十九歳の好青年と爲りて再び方廣寺に入れり、一山の衆徒は、喜びて久瀧の友を迎へ、殊に東明老師の如きは、其非凡視したる元恭が、萬卷の書と大死の妙諦とを胸中に蓄へ、意外の成果を收め得て歸山せるを悦び、復何の餘念も有る無し、然れども元恭が還回の歸山たる、敢て師傅の膝下に侍し、注兄弟の列に伍せんが爲めの故に非ず、其實は、唯告別の爲めに歸りたるなり、而かも此満山の敬愛に對し、公然別を告ぐるに忍びざるものあるを奈何せむ、斯の如くにして、一山の何人も、元恭の志を聞かず、一年、二年、三五年、永く山門に在るべしと、衆徒に信ぜられたる元恭は、歸來數日にして、又影を山門の外に隠せり、而して元恭が、二三の徒弟に告



げたる所に據れば、「余は今後、少くとも十五ヶ年の間は、再び山に歸らざるべし、余には大なる志願あり、事若し成就せば、必らず歸來すべきも、若し成就せずんば、死すとも還らず、萬一十五年にして歸らず、若くは余が異郷客死の計を得もせば、願はくは爲めに冥福を祈られよ、法主堂の樓閣には、余の遺せる櫃あり、他日訃音を聞かば、之を開き呉れよ」と、云へり、知らず斯の櫃には、抑も何物をか藏せる、歸り新參の珍客たる元恭は、此奇異なる言を遺したる儘、忽然方廣寺を出で去れり、彌山皆怪訝の感に堪へざると同時に、此疑問を解くべきものは、唯元恭が法主堂の樓閣に藏せりと云へる、一個の櫃あるのみ、衆徒は懷疑措く所無く、兎も角も之を開かばやとて、其櫃を見れば、奇なる哉、其裡には、棺あり、竹杖あり、涅槃衣あり、

幡あり、天蓋あり、白張提灯あり、悉く是れ葬時の具のみにして、此他復一物を藏せず、衆咸な呆然として自失するのみ、是に於て疑團は爲めに益々深きを加へける、後元恭は知己の友に、當時の決心を語りて曰く、「前程茫茫として際涯無く、何時を限りと期し得べきに非ざるを以て、余は此時、既に決死の覚悟を定めたり、因て先づ其葬具を整理して、異日納骨の用に供へんと欲せしのみ」と、此決心ありて、始めて能く、彼の縦横奔放、天馬空を行くの偉觀を打發し得べし、其用心も亦密なりと謂ふべし、元恭が櫃を庫中に藏めたるは、明治二十年四月廿八日にして、正に是れ彼が十九歳十ヶ月の秋なりし、而して其萬里遠征の途に上るに拘はらず、衆徒と別るゝに臨みては、一點の愁色無く、快然として語り、阿々として笑ひ、其舉動、恰



二龍支那海を亂る

も山下の在家に赴くに異らざりしと云ふ。

笑つて、方廣寺の山門を登せる元恭は、兎に角に心計りの訣別を其師父と法兄弟とに致せり、且つ其孝心に富める、必らずや祖先の墳墓に詣りて、新天地に躍り入るの壮志を告げたるならん、今は最早遺憾の、念頭に宿るもの毫末でもあらず、眼を拭ふて西天を望めば、亞細亞大陸の山河は、皆歎びて我を迎ふるものに似たり、元恭の胸中、是に到て拭ふが如く、又晴るゝが如し、急行西に向て呂嘉祥を退ひ、之に神戸に會せり、元恭が知人に語りたる所に依るも、呂嘉祥が我邦に來れる目的は、實に拔群の劍客と、有数の政治家とを得て、共に清國に航するに

在りしなり、然れども、有数の政治家は容易に得べからず、拔群の劍客も亦職すく求むべからず、呂氏は實に、幾關山を踰えて、我邦に來れる、唯一の志願を空しうするの、憾に堪へずと雖も、機縁未だ熟せずして、宿望遂に之を達するに由無きを以て、暫く之を後日に期して、日本を辭せんと決心せり、此時に當りて、呂氏が掌理に收め得たる所のものは、只だ奇才の一難僧あるのみ、其人物を取りて、仔細に之を観察すれば、佗日の良材たるべきは照々たりと雖も、如何せむ、未だ直ちに刻下の急に應ずべくもあらず、而かも呂氏が悦で之を伴へる所以のもの、亦以て彼の叟氏が期する所の甚だ遠大にして、悠容遙らざる胸中の宏量と、又能く人を相するの監識とを卜するに足る、元恭が遠州の父兄に語れる所に依れば、當時の元恭は一句の滑



語をだも、繰る能はず、僅かに、一より十に至るまでの數字を、變則的に發音し得るに過ぎざりしと云へば、單に言語の一點より考ふるも、恰も、成人の家庭に、當歳の幼兒を伴ふが如し、呂氏に取りて、其不便云ふべからざるものありしは、明かなる事實なるも、巨眼遠識、靜に成材の後を樂むの、雅量有する呂嘉祥は、決して其目前の煩累を厭はざりしが、唯此一舉、能く今日の元恭を玉成し得て、好箇の良參謀長を産するに到れり、呂氏が高遠なる大陸的の氣象は、今日あるを知りて、明日あるに氣付かざる、小利巧輩の、反省すべき要點なり、「元恭の語れる所なりとて遠州里人の云ふ所に據れば、呂氏は本年正に八十二歳の高齡に達せりと云ふ、去らば當年の呂氏は、少くとも七十二歳の老人たりしなり、然れども呂嘉祥が今日の行動を察

するに、其千里を遠しとせずして、洋の東西に縱横する活潑の點と、又恰も北辰の其處に居りて、衆星の運行を支配するが如く、多數配下を操縱すること、殆ど臂の指を使ふが如き概ある點とを以て、之を想像するに、中々に八十二歳の高齡に達せるものとは思はれず、其年輩に就ては、頗る疑ふ所無きを得ずと雖も、何様、少壯の人に非ざることば、明瞭なる事實たれば、當年に於て元恭を拉へたる呂嘉祥は、聚骨千鍛、猛志萬鍊の經驗を積みたる、老壯士なりしことは復疑ふべくもあらず、而して之に随伴せる元恭は、血氣の青年に、勤學の智識を蓄へ、更に大に、人生の精華を發揚せんとする英物なり、一を雲漢の矯龍とすれば、他は是れ池中の蛟龍なり、今や二龍相伴うて神州を去り、直に支那海を横絶して大陸に入る、願ふ、楊子江の泥



土、海を染むるの邊、彼等か捲き起せる精神的の黃浪は、高きこと將に萬丈ならんとす、之を無形に見て、之を無聲に聽かば、當年の光景は果して如何、風颯々、雲漠々、凄絶又快絶、意に万千の氣象ありて、筆に一句の文字なし。

斯の如くにして元恭は呂嘉祥に隨ひ、明治廿年六月十一日を以て、呂氏の根據地たる、江蘇省の江寧府に入れり、火山巖、花岡石巖の、屹々として、藍の如きの海に臨める、我島國に對比するときは、彼の大陸の壯大なること、實に意料の外に在り、山勢は悠々として峻峭ならず、横に廣く幅に太く、所謂、蒲團着て寝たる姿を顯し、河身は浩々として、水量の大なること、幾億萬石なるを知らず、左右の兩岸は、相距ること、海を隔つるが如く遠し、眼を放つて、原野を觀れば、渺茫として殆ど際

涯を見ず、全世界の總人口を擧つて、兩軍と爲し、横さまに開展して、激戦を試みしむるも、大厦の屋上、唯だ二個の小鼠が闘ふが如く、餘裕綽々として存し、滿目の風光、宛がら不取締に粗大にして、殆ど無制限なると共に、此處に棲息する人間も、亦自然に同化して、寛容迫らざるの趣あり、當年の元恭に取りては、恰も富士川の、危巖怪石相錯立する奔流を下りて、忽然太平洋心に出でたるの感あり、逸氣横生、豪放にして粗大なる元恭は、此光景風物に對して、果して如何の情をか發せる、彼れは實に、苦海を去て、一躍淨土を開きたるの快感に堪へざりし也。

呂氏の私塾



今や元恭は、大和魂を持てるスタンレーとなれり、否な、其學識は彼れよりも深く、其氣品は彼れよりも高く、其目的は彼れよりも大に、其經驗は彼れよりも遠く、其才能は彼れよりも勝れりとせんも、驗を見て怖れず、家を捨て、顧みざる、氣魄に至りては、二者相似たり、其異なる所は日本的なると否とに在り、故に元恭の人物を約言すれば、元恭は實に大陸的日本男子なり、而して彼をして、運般、拓大の氣象を養成せしめたるは、實に支那大陸たり、蓋し仙鶴は、九阜の高きに非ざれば、其性に適せず、元恭の大陸に於る、恰も其性に適するものなるを以て、彼が大陸に入れるは、猶仙鶴の九阜に舞ふが如し、大陸に非ざんば、元恭を容るゝ能はず、元恭にして、始めて能く、大陸を利用し得べし、知らず元恭は、之れより如何か、其得意の

地に翱翔したる、彼は呂家の私塾に入りて先づ其羽翼を養へり、是れ其大陸的運動を爲さんずる準備なりしなり。思ふに、呂嘉祥の學識才能を以てして、若し職任を清廷に求めんか、所謂、方伯連帥の職、宰相輔弼の任、素より手に唾して、之を攫み得べからざるに非ず、然れども呂氏は断して滿清の祿を食むを屑しとせず、獨り帷を垂れ、門を開きて、學生を蓄育せり、而して其授くる所の科目は、唯文學の事に止まらず、道を當世に行ふの實務を講じ、四百州の元氣を維持して、一世を濟ふの大任を、全うする所以の法を求めり、塾中に在りて、泛々たる一様の儕輩は、皆く之を措くとするも、塾の中樞に當れる俊髦は、皆な白眼以て、北京を睥睨するの流亞にして、之を概括するに、其執る所の主義、恰も西郷南洲が、私學校の組織



に於るが如く、一面には智識を開發し、學理を研究する、教育の機關にして、一面には政治を改善し、有事の秋に應ずるの道を講ずる、政治的團體の中心點たり、而して其政友は、獨り一校に籠罩せられたる青年のみならず、地方の門閥にして、恰も地方の運動を支配するの能力ある、清國の所謂、紳士は、附近一帶の地を通じて、氣脈を通ぜざるは無く、其規模の廣大にして、組織の縦横に普きこと、亦驚くべきものあり。

然して刻苦精勵、以て學藝に通ずるは、尋常中材の能くする所なりと雖も、元恭の如きは、卓然として此範圍を脱せり、之を彼が本邦に於る講學の事蹟に徴するも、一を開て能く十を知るの能力や、其發達極めて鋭く、彼の孜々として、器械的に紙上の學科を踐み、秩序的に學校を卒業するが如きは、素より元恭

の本領に適せず、之を要するに元恭は、一個特得の讀書術を有し、一種靈妙の修學法を藏す、今彼の呂氏の私塾の如きは、必ずしも紙上に定めたる學科を課せず、必ずしも器械的に、人の靈智を支配せんと試むること無く、天然の真材は、毫も他に羈束せらるゝの虞なくして、獨り自ら亭々として、群を抜き雲を摩するの發達を擅にするを得べし、左れば其行狀の謹嚴なると共に、其心術の極めて奇矯豪放なる、元恭に取りては、斯る大自由自在の研學法は、其性質に適すること、謂ふ迄も無き所なれば、元恭は其大陸に向つて其喜びを表したるが如く、其學校に向つても、亦得意を鳴らしたるなるべし、思ふに元恭は自ら書を讀むの人なり、書の爲めに讀ましめらるゝ人に非ず、師に問ふの人なり、師の爲めに導かるゝの人に非ず、故に必ずし



も書籍に心酔せず、必ずしも師説に拘泥せず、呂塾に於る、元恭が學業の發達は、故國に在る時の如く、矢張り元恭一流の歩武を以て邁進せり、左れば呂氏の塾に在ること、幾くも無くして、其學業大に進み、流石の呂氏をして、今更の如く、其傑物たるに感嘆せしめたり、而して呂氏の感嘆は、直ちに呂氏が幕下一體の感嘆と爲り、元恭は呂氏の塾に在りて、恰も錐の如く穎脱し、早く既に義黨一擘の樞軸に當れる、青年の俊才として、格段なる上級の、地位を占むるに到りぬ、貴陽週報の傳ふる所に依るに、元恭を追跡して及ぶを得ざりし、清國の警部璋某は、元恭の勢力を鳴らして、「元恭は、呂門の獅兒」と評せることあり、亦以て呂門に於る元恭が造詣の、如何に深遠なりしかを見らるに足れり。

在清中の學問

元恭は固より、圓頂緇衣を以て本領とするの人なり、故に儒學の如きは、猶法律家が、經濟學を兼ね、政治家が法律學を修むるが如く、畢竟其參考課と爲すに過ぎず、元恭が修學の大本は、爾迄も無く佛學の一科に在り、而して元恭が、清國に於て修めんと期したる儒學は、呂氏の塾に在りて、大抵満足なる研究を遂ぐるを得たり、否更に一步を進めて之を評すれば、清國の儒學は、元恭が豫想せるよりも、其程度の更に低きことを發見したり、蓋し文を作り、詩を賦し、章を探り、句を摘むが如き、彫蟲の末技に至りては、今日の清國人も、亦我邦鴻儒の、得て及ぶべからざる、才藻を有するに相違なしと雖も、其儒學の大



本領たる、「道」てふ原理の研究に到りては清人の頭腦、必ずしも我邦儒者の蓄ふる所に勝れるに非ず、然るに元恭は、「道」其物を究むるの人なり、「之」に由りて之を行ふ之を道と謂ふ」とか、或は「道は通なり」と謂ふが如き、字義の穿鑿を爲すを、畢生の事業とする、村學究とは大に其撰を異にせり、左れば、元恭は呂氏の私塾に於て、儒學を研究しつゝ、大に會得する所あると同時に、亦大に清國の佛學を講究せんとするの志を起せり、而して清國の佛敎は、由來萎靡して振はずと雖も、是れ其内容たる、佛學の眞理が、不明なることにして、其外貌を覗くときは、彼の水滸傳に有名なる、五代山文珠院の如き、堂々たる大伽藍の裡、濟々として、幾千の僧侶を養ふもの亦少からず、因て元恭は先づ、是等の壯觀を有する中にも、別て其大學校とし

て有名なる、寧郡の大叢林に入れり、既に之に入りて其講究する所を叩けば、則ち唐譯の釋經を教科書として、杜撰なる註釋を下すに過ぎず、之を我邦に於る佛典の研究に比すれば、寧ろ其粗にして精ならざるを見る、故に佛敎の眞理を究むるの點より、見れば、殆ど之を學ぶに足らざるのみ。手品の、奇にして幻なるを喝采するは、其種子の所在を知らざればなり、既に其種子を知らば、眞面目に之を見物し、之に感服するの人あるべからず、元恭は疾く既に大叢林に於る、佛學の種子を看取したり、何日迄此に在りて之を研究するも、恰も種子の知れたる手品を見物するが如し、於是乎、元恭は、去つて他の方向を取り、更に清國の禪學を極めんことを謀れり、佛敎大學校は元恭が久慈の家には非ず、因て當時清國に於て著名なる、禪宗の寺門にし



て、猶我越前の永平寺の如き、嵩山の少林寺に入りて、深く禪  
 學を究めんとせり、然るに就て其實際を視れば、文字あるもの  
 は、禪の禪たる不立文字の義を解せず、祖典を誤解しながら、  
 其誤れる所以を知らず、揚々として自ら禪を得たりと満足し、  
 文字無きものは、徒らに不立文字を説きて、不羈放縱、獨り不  
 立文字たるのみならず、亦實に不立佛法の邪徑に陥いり、毫も  
 善根の身に宿ること無き大俗僧あり、元恭が、斯道の素養深き  
 頭腦を以て、之を觀察すれば、師より學ぶべきもの無くして、  
 師に教ふべきもの多く、高徳に聞きて、悟るべきもの無くして、  
 却て彼れが無明の醉を醒さしむべきもの多し、元恭は清國の禪  
 學に就ても、亦逸早く其種子を看破し畢んぬ、氣早にして、英  
 断に富みたる元恭は、此處も亦久懸の地に非ずと活斷し去り、

更に其方向を一轉して、道を清國內地の各所に求めんと決し、  
 復も亦超然雲水の身となりぬ、而して其結果も亦、餘り面白き  
 方にはあらざりし、思ふに元恭は清國の學問社會の、亂離せる  
 に失望したり、乃ち失望せりと雖も、元恭は決して時間を空費  
 するものに非ず、蓋し學問は、學者其人の用心に因ては、如何  
 なる處處も、教場たらざる無く、又如何なる愚民も教師ならざ  
 るは莫し、殊に元恭の如きは、學問に對して、特殊なる聽教の  
 頭腦を有せり、去れば儒學を研究して、其教師先生より、何程  
 の傳授を受けざりしも、元恭の智見は、其研究の爲めに大に廣  
 まれり、佛學を修めて、其師匠先輩が有する、種子を看破した  
 るに止まるも、元恭の心眼は、層一層の明を増せり、後ち四方  
 を巡歴して、復一人の敬服すべき、識者高僧に逢はざりしとす



るも、元恭は寧ろ獨得の手腕を以て、學界の砂漠中より、金剛石を發見するの能力あり、修業界の牛馬中より、血精を搾出するの技術あり、其修學及び修學旅行は、共に元恭に向つて、莫大なる新知識を供給したるに相違なし、而して此新知識を以て、清國の學術界を縦断すれば、儒學は畢竟、官吏と爲るの受験科目として、之を研究するに過ぎず、無形の徳を修めて、人類たる高尚の威靈を培ふよりは、有形の財を聚めて、天啓の裁判所に没收を宣告さるべき、惡徳を演ずるの準備を爲すに止まり、佛道のごときは、唯三藏の經書に頼りて、勝手次第なる、清國流の、陳腐なる解釋を下すに過ぎず、外觀の尊大にして、且つ莊嚴なる、清國一流僧界の儀式を學ばんとせば兎も角も、精神上の原理に至りては、全然元恭の胸に落ちず、従つて彼は、更

に多くの學術を、清國以外の列國に、飽まで貪るの志を起せり、是に到りて元恭は、又支那大陸の人物より一變し、百尺竿頭、更に一步を進めて、世界の大陸的人物たらんとする、楷範を作

元恭と武藝

日本の僧、釋元恭の名が、始めて支那の新聞に依りて日本に紹介せらるゝや、其學殖、其才藻等の事は、後に貴陽縣署の裁判に關する記事に依りて傳へられ、元恭の經歷として、先づ我邦人の耳目に入り來りしは、元恭が勇ましき劍士にして、或は劍法に精妙なるを傳へ、或は柔術に鍛練するを報じ、僧界出身の僧たらんよりは、寧ろ武士出身の僧たるを思はしめぬ、左れば



此勇僧元恭が、是等我邦特有の武術を修めたるは、必ず我邦に於てせしことなるべしとは、一般に我同胞の解釋せし所なるが、事實は然らず、元恭は不思議にも、清國に於て、日本の武術を研磨せしなり、而して元恭が、武術に出精するに至りしは、其嗜好にも因るべく、亦其清國に於ける地位にも因るべく、決して一原因に出でしにあらざるは、明瞭の事實なりと雖も、痛く元恭の頭腦を刺撃して、武術鍛練の必要を覺悟し、奮つて之を大成せしむるに至りたる、有方なる一大原因は、思ふに必ず、元恭が徴兵検査に合格するを得ざりしことある、殊に検査上の不幸なる出来事に基くものなるべし、今元恭が、徴兵検査を受けたる時の事歴に就ては、之を特筆すべき趣味あるを覺ゆ。

元恭は、渡清の翌々年、即ち明治廿二年を以て、一たび歸朝し、

徴兵検査を受けたり、此事に付き、元恭が遼州奥山の里人に語れる所に依れば「○先生（呂嘉祥の名は既に我邦及び清廷に明かなるも、元恭は決して之を公言するを欲せず、彼れの志を爲さんが爲めに、彼れ自身の發言を引用するときは、必ず之を匿名とす、遺は本書の例と看よ）は、余が、方廣寺なる師の坊の許可を得ずして、寺中を脱走したるを非とし、一旦歸國して、必ず師の坊の許可を得來るべしとの命を下したり、故に余は此時を以て歸國したり」と云へり、而して彼れが歸朝の際、徴兵検査に應じたるなり、思ふに元恭は明治廿二年に於ては、其一月に於て満二十歳八ヶ月なるを以て、徴兵検査は明治廿一年に於て受くべかりし筈なるが、時恰も元恭の居所を知る能はず、所謂翌年廻しと爲れるものなるべし、當時元恭は果して此徴兵



検査の事あるを知りて、歸朝し來りしや否やは一疑問なり、愚  
ふに彼れは此事に心付かずして歸朝し、検査の命あるを知りて、  
之に應せしなるべし、而して此際、果して元恭の唱ふ  
る如く、單に東明老師より留學許可を得ん爲めの歸朝なりしや  
は、聊か疑ひを容るべきものあり、其疑問は之を後回しに譲り、  
此には先づ、當年身軀検査の轉末を擧げん、元恭は通常人の如  
く、軍醫の面前に出席して、通常人の如く身軀の検査を受け  
り、然るに、彼れの身軀に比し、其胸圍の狭くして肺量の乏し  
きを以て、醫官は之を不合格なりと断定したるが、凡そ軍醫の  
情として、受験者の悉く甲種合格の良成績を得んことは、其職  
掌上厚く之を希望すべき所なれば、不合格者を出すときは、衷  
情如何にも不快の念あるべし、故に右の醫官は元恭に向ひて、

「今時兵隊にも成れない様な、厄難癖のものは、人間の部には、  
這入られないぞ」  
と一喝したり、場中を見渡せば、大隊區司令官は、儼として試  
験の事務を監督し、大小の吏員、皆我皇の干城ならざるは無く、  
肩張り、眼瞑りて威嚴具さに備はり、嚮ひ近づくべからざるの  
趣きあり、尋常一様の傍聴にして、若し此一喝を受けしとせば、  
一言の辭も無くして、恐悚するの外無かるべきも、大膽にして、  
且つ敗北を疾視すること、英人が魯人を視る如き、元恭は、其  
素養ある、禪家の心機と、法問の應答法とを適用し、醫官の唇  
邊未だ其響音を絶たざる、轉瞬の刹那に、呵々と笑ひて、  
「左様ですとも、私は無論、人間の部ではありません、神、佛、



活菩薩の部ですからね、人間の部よりは、ズツと上の方でし  
 ようよ  
 と遣り返して平然たる度胸には、流石の軍醫も一言無く、検査  
 官一同も、元恭の顔を見詰めて呆然たりしと云ふ、元恭は斯く  
 して、當座の應答を試み、醫官に對して一矢を酬ひたり、左れ  
 と、「人間の部に遣入れぬ厄難」の一語は、思ふに是れ元恭の  
 頭上に降れる鐵如意の威ありしなるべし、彼れの肺質は、彼れ  
 亦自覺する所あり、其弱點に對して衝き入りたる一撃は、彼れ  
 豈斐然として、其肌に粟せざるを得ん、然れども万事に勝たん  
 ことを熱愛する元恭は、此に断然として、虚弱の肺質に打ち勝  
 たんとことを決心せるなるべし、之に打ち勝つの方法果して如何  
 専ら智力の養成にのみ傾くは、是れ肺質の弱點をして、益々其

暴を逞うせしむる所以なり、故に務めて身軀の運動を取り、疾  
 病をして閉息せしむるの他無し、而して運動の良法は、武術の  
 練習に在り、武術の習熟は、元恭が將來に大益を興ふるもの、  
 一舉にして且つ兩得、是れ元恭が豁然として大悟したる一事項  
 ならん、而して万事に熱心なる元恭は、之より大に武術を練る  
 に熱心し始めたるべきなり。

武術の練習

元恭は奥山の故齋に歸りて云ふ、「余が明治廿二年を以て、再び  
 清國に入るや、○先生の塾中にて、九州の人、齋藤利勝、加藤  
 某等、五六名の武術家に會し、之より、武藝を習古したり」と、  
 面して奥山里人の語る所に依れば、「右等の武術家中には、或は



西南の役に従事したるものあり、或は會津の役に従事したるものあり、呂嘉祥の門に此種の人傑多き由なり」と、若し元恭の説に従へば、彼の武術家は、元恭が従前の在清二年中に、未だ元恭に會したることあらざるに似たり、後説に従へば、我武術家は遠くは會津の役、近くは西南の役より、身を脱して清國に航し、呂嘉祥と結託しつゝありしが如し、果して然らば元恭が在清二年中、風々之に會するの機會ありしは疑ふべからず、此に至りて、元恭が明治廿二年の歸朝に、一の疑問を投ずべきものあり、彼れが歸朝の用向には、東明老師の許可を受くるの他に、何等かの必要なる事業はあらざりしか」との事即ち是れなり、今是等の事實、及び呂嘉祥が明治二十年に、來朝したる目的に依り、推斷を下すときは、左の想定は、必ずしも臆測の誤

れるものにはあらざるべきか。

一 呂嘉祥の門には、従前より、我邦の劍客及び武術家の、相連絡するありしは確實なり。

一 嘉祥は右の員數を以て、足れりとせず、更に多く、我劍客及び武術家を求めり。

一 嘉祥が廿年の來朝は、其目的を遂げざりしを以て、廿二年に至り、元恭を歸朝せしめて、適當の人を求めしめたり。

一 元恭は、右の用向を果し、若干の武術家を得て、之を先發せしめしか、若くは同行せしか、兎に角元恭は、自身其人を蒐集せしか、又は蒐集することに盡力したり。

今若し元恭の説に従へば、元恭は明治廿二年以後に於て、武術の練習に着手せしもの如く、奥山里人に従へば、之より以前



に於て、元恭が武を清國に學ぶの機會ありしが如し、思ふに後  
 回に開設する所の、元恭が武力を單關台に現はしたる事實は、  
 恰も明治廿五年の出來事なるを以て、廿二年に入門せしものと  
 せば、其造詣餘りに速きが如しと雖も、彼の頭腦は、甚だ明澄  
 にして、其手腕は甚だ敏活なるものあれば、三年の學習に於て  
 驚くべきの發達を來せしやも知るべからず、且つ廿二年に於て  
 は、元恭必ずしも健勝なりとせず、其武藝に出精するの際に當  
 りては、牒量實に二十貫を數ふるに至りたりと云へば、思ふに  
 二十二年に於る、徵兵検査の成績に慣りて、自家が周旋したる  
 武術家に就き、大に其武を練るに至りしならん。  
 兎にも角にも、元恭が、清國に於て得たる、大なる獲物は、實  
 に武藝の二科に在り、彼れが渡清の目的としたる、清國の儒道

と佛道とは、彼れが其師に教へらるゝよりも、寧ろ自ら發明し、  
 悟了したること多かるべし、勿論、詩賦文藻の上に就ては、彼  
 れも亦清國より學びしものあらんも、原理としての研究に至り  
 ては、到底、彼れが自身の發明に待つの外無し、然るに武藝の  
 一科に至りては、是れ實に豫想外の結果にして、彼れが宿願の  
 外に在りしものと謂ふべし、而して元恭の清國に於ける、決し  
 て其武術を欠くべからず、元恭にして、若し只た文明人の占斷  
 する居留地に踰躡し、毫も内地に入るの要なきものならしめば、  
 武藝の用を見ること無しと雖も、清國の内地に非ざれば、決し  
 て元恭の事業を爲すに足らず、然るに清國の内地は、殆ど是れ  
 無政府の有様にして、盜賊横行、兇徒出沒、而して之を保護す  
 るの警察は完全なる制度を欠けり、假ひ元恭をして、滿清政府



に柔順なる生民たらしむるも、猶武術を以て、自衛に供するの必要あり、元んや、清朝の反對黨を以て自ら居り、其黨の領袖として、樞要の機務を握り、時としては、警察ありと雖も、斯ふるに處無きの境遇に居るものをや、而して元恭が、武術の助けを得たることを、擧げて數ふべからず、元恭と云へば殆ど武術之に隨ふの趣あるに至りては、亦盛んなりと謂ふべし、思ふに元恭は、武術無しと雖も、亦火山に攀ぢ、氷海に潜むを辭するものに非ず、然れども彼れの豪膽に彼れの武術を加ふるに至りて、彼れは益々偉大なる行動を逞うするを得たり、彼れが武術に負ふ所のもの亦甚だ多し、而して彼れが如何に其武を活用せしかは、乞ふ之を後回に見よ。

元恭の足跡

元恭は、儒佛二道を求めんが爲めに、支那大陸に入り、頗る大陸的日本人たるの素養を得たることなるが、清國の學藝は元恭をして失望せしむるの外無かりしかば、彼れは之より、世界各地を漫遊して、其至る所に得意の學術を求め、純粹なる大陸的日本人と化成人に至れり、然れども精密に彼れが足跡の及びし所を追究し、其各地に於て如何なる事業を爲せしかを擧ぐれば、甚だ困難なるを以て、今は只だ其大要を録じ、彼れが經歷の概略を知るの便に供せん、抑も元恭が、清國に於る根據地として、其客館を駐むる所は、江蘇省の江寧府にして、大明歴代の王都たる南京にあり、之れよりして、西は西藏に及び、南は



雲南貴州に至り、北は山東直隸の各省、南は遼東河漢、西は陝西、東は湖北、出入省、四百餘州、一として、版図を盡すは、此間に在るは、  
 知識及び觀察は、非常の高度に達せり、元恭は又幾回か印度に  
 も出入して、深く佛學の根本を研究せり、其結果として、元恭  
 は巧の印度語を綴り、且梵字の經文を朗誦するを得て、印度  
 富麗の信仰を博せる事蹟も亦頗る多し、彼れは之より更に進ん  
 で南海を臨み、爪哇に入り、此に醫學を修めて、内外科に通じ、  
 夫れより和蘭陀に到りて、大學に登り、英、佛、曼等の諸國に  
 遊歴せり、而して彼れは亦、西半球にも留學して、青木喬と共  
 に米國イタノイス州の法科大學に入り、學士の稱號を得たるは  
 明瞭なる事實なり、「凡そ知識は其人の旅程に伴ふ」と云へる金  
 言は、多くの點に於て眞理を合めり、左れば元恭が、胸中に著

得たる、學問と經驗と膽力とは、彼れが足蹟の廣きに就ても  
 遜すべく、其化して大陸的の日本人となりたるも、亦偶然に非  
 ざるなり、以上足蹟の及ぶる所を概括すれば、元恭は單に之を  
 旅行家とするも、近世日本人中の大旅行家として、恐らくは其右  
 に出づるものなかるべし、然れども彼れは決して旅行家を以て、  
 満足するものにあらず、此大旅行の目的は、前途遠且の大なる  
 を知りさるべからず。  
 元恭が奔放の區域は、廣く且つ遠しと雖も、實は一定の軌道を  
 走れる遊星の如し、老たる日本人の眼より見れば、其軌道の遠  
 遠廣闊にして且つ去來の突兀たるを、恰も慧星の如しと爲さん  
 也、彼れには彼れの運動を支配する太陽のあるあり、元恭如何  
 に世界に奔放すと雖も、彼れの帯には強大なる綱の付着するあり



此綱を採れる所は、即ち太陽にして、元恭は猶遊星の如く、元恭は曾て此太陽系外に脱出したること無し、而して其太陽たるべきものは、果して誰ぞ、謂ふ迄も無く呂嘉祥是れなり、元恭は斯く大遊歴を試みたるが、如何にして其資を辨じたるか、或る地域を履渉するときは、元恭必ずしも、旅資の供給を欠かざりしならんも、歐米の大學に留學せる間は、何人か學資を支給するもの無かるべからず、而して元恭は全く之を呂嘉祥の供給に仰げり、抑も呂氏の眷顧を蒙るものは、獨り元恭のみならず、後進有爲の士にして、其支給を受くるもの、本邦人及び清國人にも其人亦少からず、清國の南州を以て據すべき呂氏が、人才を養成するに當りては、如何に其財を吝まらずして、之に強勉するかを知るに足る、蓋し虎を畜ひ豹を養ふ者、必ず之を養

ふの目的あり、呂氏の斯く有爲の子弟を養成するは、其志決して少くにあらず、呂氏は清國の義黨たる、哥老會の首魁にして、同會を總理せるものなり、左れば其門下に立てる人才は、悉く義黨の一人にして、皆同會の爲めに、死力を盡さんことを誓はざる無し、現に元恭の如きも、呂氏が恩遇の厚きに感じ、其生涯の一半を擧げて、會の爲めに盡力し、以て呂氏が厚誼に酬いんと心の心を抱き、尙十年の歲月を、奔走馳驅の間に費やさんと決心せる所以のもの、亦偶然に非ざるを知るべし、而して元恭が、將來に爲す所あらんとする目的は、斯の如くなるが、之より先き、元恭が既に爲し來りたる經歷の内にも、其目的の經營に伴へる爽絶快絶の所爲亦尠からず、今之を舒ぶるに當りては、先づ哥老會の歴史、性質、及び同會に於ける、元恭の位置等を叙



清國の在野黨

せざる可らず。

清國の在野黨は其種類甚だ多し、恰も一椀より、數個の幹枝を生じたるが如く、其未派、支會又甚からざるを以て、一概に之を説き盡し難しと雖も、其最も大なるは哥老會にして、連化會之に亞ぎ、眞に在野黨らしき團體は、此二會を措きて他にありとなく、此二會は實に在野黨の主腦とも謂ふべきものなり、而して哥老會なり連化會なり、清國の在野黨は、何れも滿清政府を目じて、不俱戴天の仇敵となすものにして、一朝乘ずべきの機に會せば、唾手して起たんとするの希望を有せり、故に道臺縣官等、濫りに政權を挾みて、下民を抑壓せんと試むとあらば、

彼等は一時に蜂起して、其暴を制するが爲め、小叛亂を起すと亦甚しとせず。在野黨が大に奮起して、其成行を施すの期は、未だ俄かに豫知すべからざるも、右等小叛亂を起せる刺撃は、現に清國政府をして大に之を懼らしめ、自然に暴政を遠うするを得ず、爲めに清國の政治は、是等在野黨の勢力に依り、多少其衡平を維持し居るなり、概して在野黨と云へば、是等の正義公道を執りて綱領と爲すものならざる可らず、而も羊頭を懸けて狗肉を賣るもの、各國に多し、故に清國の在野黨なるもの内にも、有名無實のもの無しとせず、是等の似て非なる在野黨も、時としては無頼の黨類を結合して、騒亂を醸し、其民を攻撃し、其財を奪ひ、其婦女を辱かしむる等、亂暴狼藉を極むるとあり、然れども彼の哥老會、連化會の如きは規律頗る整ひ、



毫も其民を凌虐するが如き非行を爲すこと無し。  
 今先づ哥老會の性質を叙せんに、明朝顛覆して、滿清の治下に  
 屬し、四百餘州を擧げて罌粟の花と爲るや、明朝の遺臣にして  
 大に之が報復を圖るの志士あり、東西唱和南北牽引、相結むて  
 一黨を組織せり、是れ實に三百數十年前の事にして、其黨名  
 を遺忠黨と稱し、明朝を再興するを以て大目的とし大綱領とな  
 せり、今の所謂哥老會は、即ち遺忠黨、遺忠黨は即ち哥老會に  
 して、二者全く異名同躰なりとす、左れば三百年後の哥老會も、  
 其志明朝の恢復に在りて、約言すれば則ち明朝主義を固守する  
 に外ならず、斯の如く、遺忠黨と哥老會とは、異名同躰なるが、  
 特に遺忠黨の名稱を改めて、哥老會と爲したるは、黨路上の掛  
 引より出でたる事にして、哥老會とは、恰も天人會と云ふが如

く、極めて廣き意味を有し、今や必ずしも、明朝遺臣の、明朝  
 主義を奉ずる、團躰とのみ看做すべからず、内に於ては凡ての  
 階級、總ての人物を網羅して、大なる團躰を形成するとを得べ  
 く、且つ大多數の黨員を吸集し得るの便あり、外に對しては、  
 其名の廣漠なる丈け、容易に其内容の大小を測知し得られずし  
 て、其仇敵たる滿清政府をして、大に畏懼する所あらしむるに  
 足れり、左れば此政稱以後、黨勢益振ひ、今に至りては、其根  
 四方に蔓延して、非常に龐大なる一大在野黨と進化し來れり、  
 然れども黨勢徒らに増大するのみにして、其主腦たる諸機關備  
 はらず、若くは其規律整頓せざんば、龐大は畢竟何の効をも奏  
 せずと雖も、哥老會の組織及び規律に至りては、充分整理せら  
 れ、一たび驟起せば、侮り難き大運動を、爲すに足るべき實力



あり、而して哥老會の參謀部たり主腦部たるものは、儒者にし  
て、一黨の主義を翼賛し、之に資金を給するものは、富豪の商  
人甚だ多く、殊に米國其他諸外國に出稼ぎ居るものは、樂に哥  
老會の、主義を奉ずるものに、非ざるはなし、故に其黨員の如  
き行、幾十方に上れるや、之を明かにし難しと雖も、其重なる  
ものを舉ぐるも、概算四十万の上に出づべしと云ふ、左れば之  
を中心として、其影を望みて、趨る所の未派を數に大入れば、  
非常の大多數に上るべし、哥老會の實力は、斯の如く尨大に  
て無邊なり、左れば其勢力も又非常に強盛にして、全會一團の  
運動としては、未だ曾て戈を把りて、起ちしことあらずと雖も、  
滿清政府をして本會を見ること、恰も鬼を見るが如く畏懼せじ  
ゆり、故に其名聲の如きも、亦海外まで轟き渡り、彼の獨逸の

韓血宰相セムイク公をして、「魯國の虛無黨、佛國の社會黨、  
英國の職工黨、清國の哥老會は實に恐るべき世界に於ける、西  
大政黨なり」と講壇上に演説せしむるに至りたり、他の三大黨  
は、其結合方の如何に至りては、容易に之が優劣を判すべから  
ずと雖も、其金力の一點に至りては、到底哥老會に敵するを得  
ず、哥老會が三百年來、運動費として有事の日に供する爲め、  
蓄つたる積金の如きは、既に億を以て數ふべき巨額に上れり、  
哥老會は實に斯の如く、優勢にして大望ある一大政黨なり、然  
るに元恭は此雄大なる、一黨の帷幄に坐して、其樞機を參與す  
るものなり、其樞機として、掌大狹隘の故國に、盤伏するを好  
まざるは、亦宜なりと謂ふべし。



哥老會の規律

清國人は、政治上の組織に於ては、不規律亂暴にして、殆ど其  
 弊を爲さざることは、征清の役に於ても證明されたる事實なるが、  
 是れは、中樞の神經麻痺して、全部に普及せざるに坐するのみ、  
 苟も之が主腦部に立つ所の、神經中樞にして、能く人を駕馭す  
 るの能を備へんか、命令を遵守するの點に於て、忍耐力に富む  
 る點に於て、清國人は充分に紀律の下に服従し、且つ能く其命  
 令を力行するの、美質を備へ居らざるに非ず、哥老會の規律の  
 如きは、能く是等清國人の美質を利用せるに似たり、凡て哥老  
 會に加盟せんと欲するものは、其何人たるを問はず、元來が和  
 歌の浦にて、呂嘉祥に差入れたるものと、同様の誓書を作り、

血判を捺して、之を納めざるべからず、而して既に之を納めた  
 る以上は、誓約面の條項は、死すとも之を守らざるべからず、  
 今茲に其規律の能く履行さるゝ事實を證せん、近年迄、哥老  
 會の首魁は、果して誰人なるや、清國政府も全く之を知る能は  
 ざりしなり、左れば會員は其數果して幾許なるや、又其散布せ  
 る地方は何れなるや、如何なる規律の下に、如何なる運動を爲  
 すや、一切の事得て知るべからず、而して滿清政府の令下に屬  
 する探偵吏が、獨り之を看破し得ざるのみならず、米國政府の  
 偵吏と雖も、哥老會の隱約なる組織には、殆ど之を持て餘せり、  
 彼の米國太平洋沿岸に有名なる、清國人の團體は、是れ皆哥老  
 會員にして、屹然米國の中央に、一個の支那帝國を作り、其商  
 社の如きは、支那移民全社を統率して、之に其進退を命令す



るのみならず、命に背くものは、捕へて之を死刑に處して顧みず、商社にして、生殺與奪の大權を握るは、彼の東印度會社の隆盛なるライオン時代は、イザ知らず、今日の世界に於ては、實に絶無の特例なり、米國政府の如きも、其始めは、大に同會の動靜に留意し、具に其會規及び運動の探偵を盡したりと雖も、到底其秘密を發見するの途なきを以て、遂に其手を引くに及べり、故に哥老會の商社は、一面には支那移民の、細大一切の事業を網羅する商業會社にして、一面には米國に於る支那移民の、主權者たるの觀あり、其勢力の大なること斯の如し、之を以て米國政府は之を國外に放逐し、全く支那人の足跡を絶たんとし、百方其政策を講ぜしが、容易に之を斷行するを得ず、現に太平洋岸の各銀行に對し、支那人が預け入れ居る金額は、

四億弗（凡そ七億六千万圓）の餘に上り、若し支那人を放逐するものとせば、其結果として、是等巨額の預け金を、一時に取り付けらるゝものと覺悟せざるべからず、斯くては海岸各銀行の過半は、破産の慘況を見るに至るべしと云ふ、故に流石の米國政府も、口には放逐を唱ふと雖も、自國の利害上、此政策を決行するを得ず、然るに彼等支那人は其耳の傍らに放逐の聲を聞きながら、平然として驚かず、如かも辨髪を垂れつゝ、堂々乎として北米の大都會を濶歩し、其紐育の中心に、佛檀を飾りて恬然怪まず、白人の洲土にありて、白人と交はりつゝ、毫も白人化せず、始終依然たる支那主義を以て、大小一切の事に應用するに至りては、彼等の力も亦た驚くべきものならずや、此一事に依るも、哥老會の組織が、如何に尨大にして、如何に複



難なるかを推知するに足らん、去るにても吾老會が、斯くまで發達瀾漫したる所以の原因は、果して何れに在るか考ふるに、當今の首魁たる呂嘉祥が、統率駕馭の才略の非凡なるもの、少くとも其一大原因なるべし、呂嘉祥は其足跡實に坤輿に普ねく彼の虛無黨、社會黨の如き、歐洲秘密結社の組織は、夙に仔細の視察を遂げ、之を斟酌折衷して、吾老會に應用せり、故に會の大膨脹は彼れが如きに関せず、其規約及び黨の首領すら、何人たるかを知るべからざること右の如し、然らば全く散漫にして、統一する所無きやと云ふに、其一黨の上に於ける、團結力の鞏固なることは金石も管ならず、一朝其首魁の身上に、危難の來るが如きことあらんか、會衆皆手を執りて起ち、之が救護に盡力する等、規律整然として備はれり、且つ此黨の目的とす

る所は、甚だ大にして且つ難きが故に亦能く持久の策を取り、大に資金を積み、成功を永遠に期し、三百年の星霜を経て、其思想一日の如く、充分の成算固熟するを待ちて、決然爲す所あらんとする、手段の遠大なるを見れば、亦支那人特得の長技を顯はせり、而して呂嘉祥は、當年八十二の高齡に達せりと云へば、假ひ二十年を若くするも、尙耳順を超えたる老人なり、然るに彼れの意氣は老來益す健にして、毫も衰へたるを見ず、其限りあるの壽を以てして、敢て功名を貪らず、一定の歩武を守りて、徐々として進歩するの道を改むること無く、我若し成功せずんば、後來我に續ぐものに譲らんと決心して、毫も周章すること無し、其抱負の遠大にして、且つ縛々迫らざるの度量あるに至りては、彼れも亦四百餘洲第一流の人傑なるべし。



哥老會の兄弟

哥老會と左提右協して、在野黨の要地を占め居る、進化會とは如何なるものぞ、而して又哥老會と提携の關係は如何、少しく之を説明して、清國に於ける在野黨の事情を悉し、以て元恭其人が如何なる政友の間に、周旋しつゝあるかを、知るの料とせん、抑も今の進化會なるものは、始めより進化會として、成立せしに非ず、白蓮會と稱せる團體より、分立せるものにして、其源は白蓮會に在り、白蓮會は、今を去ること百二十四年前、即ち清朝乾隆帝の三十八年に於て、時世に不平なる、崔球辰の創立せし所に係れり、此會の成立は、右の如くなるを以て、少しく才氣ありて、時の逆流に立てるものは、其主義の何たるを

問はず、之を招納したるが故其志は亦清朝に抗して、時流を冷眼視するに外ならずと雖も、清濁併せ呑み、玉石混淆して、自然に英雄の不平團結を爲り、不平即ち是れ會の綱領と、云ふが如き有様と爲りしを以て、苟も失意の地位に立てるものは、之に加盟するの便宜あり、然るに世の所謂英雄は、大概自稱英雄にして、多くは英雄の一端、詳しく云へば、英雄の欠點を有せる、粗笨無規律に奔るの人なり、白蓮會の英雄も、亦斯る種類の英雄多く、徒らに人を欺くを以て、英雄の本領とする、小なる李鴻章の如きものあり、徒らに色を漁するを以て、本領とする、小なる丁汝昌的英雄あり、何れも英雄の力量無くして、英雄の末弊を受けつゝ、揚々として得色ある輩、會の多數を占るに至りたれば、會の名聲日に墜ちて、社會の信用愈々



薄らぎ、君子を以て居るの人は、之に加盟するを屑しとせず、相率ゐて、會を脱したる結果として、白蓮會の精神は此に死し、後には白蓮會の形骸のみ残存し、今の白蓮會は、殆ど此形骸の盲動するものとも謂ふべく、清國の良民社會より云へば、滿清政府の壓制、白蓮會の暴行、之を衡りて、輕重無しとするに至れる部分もあり。

斯の如く白蓮會の有様、日に非なるより、徳を以て本とするの君子者流は、断然其政友たる、白蓮會員と分離して、別に蓮化會なる一旗幟を樹て、大に白蓮會の精神を遺傳して、新健快猛なる一大政社を起さんと奮起せり、其時は、嘉慶帝の十六年にして、今を去ること八十三年の昔に在り、爾來團結内に鞏固にして、黨勢外に張り、白蓮會の如きは、屢々暴動を起すことあり。

るも、實は社會黨無政府黨の、今一層亂暴狼藉なるもの如く、手當り次第に、良民の財物を強奪し、良家の婦女を辱かしむる等の悪行、至らざること無く、彼等自身に唱ふる所の義擧は、其實破落戸が、公けに暴行を働らくもの比外ならずと雖も、蓮化會に至りては、止むを得ずして矛を執り、刃光を示して、汚吏の暴行を制壓するの時と雖も、其秩序は頗る正しく、苟も良民を侵すが如きこと無きを以て、良民の社會は、之に頼りて以て官に抗するの助けと爲し、會を信任すること厚く、時々謝金を贈る等の事も、亦少からず、而して蓮化會には、亦夫れを財産管理の規則を立て居ること、恰も哥老會の如きが故、會の財産としての積立金、亦決して少からず、之を有事の日に於る、秘密の軍資金として、年々之を利殖し行けり。



清國に於て、在野の正氣を代表する、二大巨擘とも謂ふべき、  
哥老會と進化會との關係は、門外漢の得て、覗ひ知るべき限り  
に非ずと雖も、二會は其精神に於て、兄たり弟たるものにして、  
其行ひに於ても、亦伯たり叔たるものなれば、兩者の間柄は、  
極めて親密なるには相違無く、概して云へば、哥老會と進化會  
とは、極めて交誼の厚き、親友の間柄なりと謂ふを得べし、例  
へば哥老會なり、進化會なりの積立金は、概して外國銀行に預  
け入るゝの仕組なるが故、外國の某地に、進化會員のみありて、  
哥老會の管理部員あらざるときは、之を進化會員に托し、其名  
義にて預け入るゝを例とし、又某の外國には、哥老會員のみ居  
りて、進化會員わらざる場合には、亦哥老會員の名義にて、銀  
行の出し入れを司とるを例とす、左れば財政の點に於ては、二

會互に相融通して、各其勘定を立つるの習ひなるも、何様哥老  
會は、三百年來の團體なれば、財産の點に於ては、無論進化會  
の及ぶ所に非ざるなり、知らず、彼等が奮然として起つは、果  
して何の日ぞ、而して元恭は、實に彼等の間に於る巨擘たるな  
り。

元恭と哥老會

一口に、之を哥老會と云ふも、其内又多少の區分無きに非ず、  
而して哥老會の、哥老會たる所以の、主腦部は、實に第一派と  
稱する、儒者派に在り、是れ實に哥老會の參謀本部にして、一  
會全體の、頭腦を組成せる、重要なものなる故、滿清政府は殊  
に之を憚り、常に姦儒と呼べりと云ふ、彼の進花會と、意氣



投合して、互に相融通し、調和し、二會の連絡をして、益々鞏固ならしむるものも、亦此派の力に在り、但此派は、其期する所、遠大なるを以て、未だ曾て、區々たる一揆同様の、小亂を起せしことあらず、三百年來、夷然として、一定の歩武を退ひつゝ進み、一回も自ら、矛を把て起しことあらずと云ふ、鋭氣を養ひ知計を練り、三百年來、飛はず、鳴かざる儒者派が、大に其羽翼を張りて、一搏を試むる日は、果して如何なる事業を起すべき乎、將た如何の果結を清國に産出すべき乎、而して日本の僧、釋元恭は、哥老會中の此一派に屬し、万巻の文、電光石火入神の武、凍たる日本魂、温たる宗教心、斗大の膽、應變の機智、之を一身に集帯し、大に會衆全昧の尊嚴を受け居れり、思ふに彼が其會中に重要な地位を占め居るは、明瞭なる

事實なれども、大望あるものは、小成功を語らず、其關係の大部分の如きは、今得て之を知るべからず、知るも亦之を世上に公布すべきに非ず、因て此には只其大要を叙述するに止むべし。哥老會が呂嘉祥の手に操縦せられ、呂嘉祥は哥老會の頭腦を形成し居ることは、既に之を記載したる所なるが、此頭腦の頭腦と爲り、之に智計を捧げ、之が謀議に任じ、之が命令を他の部局に傳へ、以て一黨の首領を補佐する、參謀部其物は、實に哥老會の如き、尤大なる黨派に在りて、必要欠くべからざるの機關たること、復言を須たずして明かなる所なり、而して此重要な參謀機關は、哥老會中何人が之に當るか云ふに、彼の第一派即ち儒者派に在り、其儒者派に在りて、何人が最も能く呂



氏の親昵し推服する所と爲れるやと問はれ、釋元恭其人なりと謂ふも敢て過言にはあらざるべし、元來呂嘉祥が、重きを日本人に置き、或は政治家、或は劍客等を日本より聘して、之と事を共にせんと欲するの事情は、彼れが明治二十年に於て、親しく來朝せる事實に徴しても、明かなる事なるが、彼れが斯く日本人を推重する所以のものは、全く日本人の氣性が、政治的、義勇的の働きに於て、支那人民より、遙かに其上位に立てることを看破せる結果に外ならず、故に彼れは始めより日本人の長所を知り、之に依頼して、其參贊の益を受けんことを欲したるものなるに、元恭とは奇縁を和歌の浦に結びてより此に十年、其間非常の親しみを重ねたるに、元恭の進歩は特に驚くべきものあり、其學術に於ては、會員中能く之と比肩し、拮抗するも

無く、其武藝に於ては、四百州を獨歩して、何人も之を制する能はず、文武を兼備して之を兩全せるに至りては、呂氏たるもの、豈之を推重せざるを得んや、然るに、元恭に就ては特に一層之を重用するに便なる事情あり、元恭は出世間の人物にして、復人生の煩冗なる羣累を有せず、彼れは彼れの欲する所に隨つて、如何なる危険も之を冒すを得るの便あり、加ふるに其人借借なるを以て、世を忍び、且つ必要の場合に於ては、其地位を利用して、多く世の同情を匿くの便あり、呂氏たるもの實に之に親昵せざるを得ず、其呂氏との關係斯の如くなるを以て、元恭の呂氏に於る、武藏坊の源九郎に於るが如く、元恭は今や哥老會の參謀總長と爲り、隨つて元恭の勢力は、哥老會中に振へり、故に元恭は數多の日本人を率ゐて、所謂第一派中の中樞を



形ちづくり、常に呂氏と氣脈を通じて、重要な事業を擔任し居  
 れり、左れば元恭の海外に往來するや、常に甲部隨從員、若く  
 は乙丙部隨從員なるものあり、何れも皆日本人にして、哥老會  
 の事業を翼賛するの一要素と爲れり、當年方廣寺の難僧も、此  
 に至りて、驚くべき巨人と爲れりと謂ふべし、  
 元恭の地位右の如し、故に元恭は、屢々清國內地に縱横して、  
 屢々危険を冒せり、彼れは知人の問に答へて云ふ「清國の内地  
 は、無政府同様なれば、遭難は毎度の事にて、珍らしくも無き  
 故特に取り立て、之を説く程の事も無し」と、亦以て彼れが、  
 爽絶、快絶の生涯に在ると共に、險絶、危絶の地位に在るを見  
 るべし、其險と其快と、共に十にして其一を盡さざるも、之よ  
 り彼が遭難の一二を録して、其他を類推するの料と爲さん。

單關臺の危難

北清地方には、妖怪退治と稱する奇風あり、魔物が田畑の作物  
 を荒らすとか、若くは人家の近傍に來りて、奇異なる聲を發す  
 るとかの場合には、村民等は、官廳に妖怪退治の事を出願する  
 なり、官廳は其部落中に在る、城隍廟（我鎮守の神社の如し一  
 部落には必ず之れ有り）の番人に命じて、之を退治せしむ、番  
 人は廟中に生へある木を以て、木刀を作り、藁にて作りたる盾  
 と共に之を携へ、身には、虎の皮の如き彩色を施せる、奇異な  
 る服を着け、角兵衛獅子の蒙るが如き風に、鬼の面を頭に戴き、  
 妖怪の巢窟に向つて、進行するなり、此番人は妖怪退治の正使  
 にして、之を護衛するには、兵士あり、李鴻章部下の兵士、又



は奉天將軍の親兵等、其管區に依りて異なれども、十數名の兵士小隊を作り、武装して彼の正使に従ふ、斯くて正使は妖怪窟に向ひ、奇異なる態度と音聲とを以て、何やらん咒文を唱へ、之にて妖怪を鎮壓したるものと爲し、引き返す風習なるが、元恭が北清周遊中、此一隊と衝突したる危難、寧ろ奇談あり、事は其頃の上海清字新聞に見へたり、頃は我明治廿五年、清曆光緒十八年の事なりしが、元恭が文武習學の羽翼既に熟し、四百餘州遍歴の志望にて、北清地方を周遊し、奉天府に至らんとするの途中、山海關より錦州に向つて行脚したり、關と錦州との間に、單關臺と云へる一小村ありしが、此處の村民が、恰も妖怪退治を願ふの必要ありて、例の一隊は、其管轄官廳より繰り出されたり、總じて妖怪の夜中に出づるは、何處も通例なる

を以て、之を退治するも、亦夜中に行ふを法とす、然るに元恭は、腕に覺えの有る人なれば、晝は駐まりて寝ね、又は觀察に従事し、夜に至りて旅行するを習ひとせし故、妖怪退治の一行と、元恭とは、單關臺附近の野原にて、端無く衝突するに至りたり、彼の一行は、薄氣味悪き心地ながらも、職務の爲めに止むを得ずして、出づること故、疑心に暗鬼の生ずるも無理ならず、彼等は戦々兢兢として、往來を濫り行く内、不思議や前途に當りて、人立する一動物を見出しぬ、星明かりに透かし見れば、尋常清國人の、眼に映する姿にはあらで、疾風を包むかど見る計りなる、廣き袂を左右に翻へし、火銃を吐くかど疑ふ計りなる入道は、鐵錫を突き鳴らしつゝ、堂々として進み來れり、夜行は清國兵民の爲さる所、但し盜賊の姿に非ざるは、



疑ふべくもあらぬ故、彼れこそ妖怪に極まつたれ、一たび口を  
 開かば、天部十萬の神兵を呑むの、悪相を現はさば、何とかせ  
 ん、妖怪來の恐怖は、彼等一行の毛髮をして、針を植えたるが  
 如く立つに至らしめたり。  
 妖怪退治の一行は、生きたる心地の無き迄に驚きしが、今は過  
 らればとて、妖怪が飛行の術に叶ふべくもあらず、覆み殺され  
 んは必定なり、進みて學たんは怖ろしけれど、逃げ果すること  
 の叶はずば、寧ろ死力を盡して、打て掛るの外は無しと、流石  
 に臆病なる清兵も、最後の勇氣を奮ひ起したりけん、十數名の  
 兵士は、筒先揃へて元恭を目懸け、小銃を亂射し始めたり、元  
 恭は敵を何物とも、知る由あられぬと、星明りに其姿を見れば、  
 正しく清國の官兵なれど、何故ありて發砲するや、問ひ極めん

暇も無し、元恭固より暴虎憑河死して悔い無き、匹夫の勇を弄  
 ばずと雖も、事此に至りては、最早絶對絶命の場合なり、止む  
 を得ずして、單身彼等に當らんと決心するや否や、例の鐵禰杖  
 を取り直し、飛び來る彈丸の雨を冒して、矢庭に官兵等の眞ん  
 中に打ち入りたり、飛道具にて打ち果さんと、恐々ながら期し  
 たる的は徒に外づれて妖怪は、遂に手元に込み入り來りぬ、驚  
 きながら、打ち据えんとすれど、敵の早技飛電の如く、出沒  
 自在の働らきに、及向ふ術のあらざれば、三五人の清兵は、半  
 死半生の片息と爲るまで、即座に叩き伏せられたり、始めよ  
 りして臆病風に誘はれたる清兵の、此に至りて争でか堪へん、  
 兎も角も逃げ得る限り、逃げ延びんと、天に足し地に首して、  
 雲を霞と逃げ散つたり、元恭は能き程に敵を追ひ捨て、道に落



ち散つたる、敵の軍帽等を拾ひ取り、悠々として錦州を指し進  
行せり、逃げ失せたる清兵は、元恭よりも、早く錦州に着せし  
こととして、其所管長官に向ひ、昨夜敗走の轉末を報告し、「途に  
妖怪に出合ひて、打ち止めんと競ひ掛りしかど、敵は魔性の變  
化なれば、モーセルの銃丸も、貫き得る限りに非ず、三伍の職  
友は、矢庭に打ち倒され、手に餘りて詮なき儘、速かに後の  
手配りを仰がん爲め、斯くは馳せ返りて注進に及び候ふ」と、  
辭を巧みに辯解したりしかば、長官も眉を擡めて打ち驚き、如  
何はせんと、妖怪退治の第二策を、計畫し居りたり、然るに元  
恭は引き續きて、錦州に入り、府廳に訴へ出で、云ふ様、「野  
元恭昨夜軍冠蓋附近を通行の折、官兵の襲ひしたる十數名の一  
隊は、一言の問答にも及ばず、野濤に向つて、一齊射撃を加へ

候ふ、野濤固より死に當るの罪無ければ、處して非命の終りを  
送ぐるを得ず、止むことを得ずして、神杖を振ひ、之に當り候  
ひしに、三伍名は杖下に伏し、他は逃走致して候ふ、因て野  
は、途に落ち散りたる軍帽等を證とし、此に訴へ出で候ふ、抑  
も無事の旅客に向つて、亂撃を加ふるは、榮村の暴政も及ばざ  
る曲事たり、何とか御處分ありて、以後の懲戒を得たし」と、  
滔々として述べしかば、府廳の吏員は痛く元恭に陳謝し、其無  
事を祝せり、元恭は之より目的の奉天府に向ひしが、後、彼の  
兵士等は、無法の所行と虚偽の報告とを爲せし爲め、夫れく  
處罰を受けしとぞ、今こそ笑柄にも數ふべけれ、此時誤まつて  
一發の命中ありしとせん乎、可惜英物を泉下に送るべかりしな  
り、返すくも元恭が、一代の危難にして、又一代の幸運なり



しと謂ふべし。

魯國大佐を救ふ

元恭は又、賊衆を奔らして、魯國士官を救ひしことあり、此事は清國新聞等の記事あるに非ず、曾て清國に在りたる元恭の知人が元恭より聞き取りたる、談話の一節なるが、其時日等は定かならずと雖も、元恭が山海關を陥破して、奉天府に至らんとせし時の、出來事なる故、前項妖怪と誤認せられたる、危難の時と同じ時代にして、光緒十八年、即ち我明治廿五年中の出來事なるに相違無し、是れ亦、哥老會の武藏坊たるに、相應しき勳らしきを爲し、一事實なれば、今左に其事件を擧げん、山海關より起りて北走する、万里の長城附近に、第八煙臺と呼

べる地あり、人煙揚らず、山賊時に出没する所なるが、元恭は程を山海關より起して、奉天府に志し、一錫を杖きつゝ、行く大々見獻的土功の遺物たる、長城を睥睨して、健歩を運べり、時は我明治廿五年、某の月某の日、夕陽西に昏づきて、暗黒の巨魔世界を呑まんとするの時、烽火を揚げて、敵襲の警報を傳ふるの遺跡たる、第八煙臺に至りたり、山陰の高原人既に絶え、四邊寂々として、世は實に太古の如し、元恭は心機を丹田に鎮め、此光景を取りて、大に古道を考ふるの資と爲しつゝ、路傍の石に腰打ち掛けて、小憩したるとき、魂切る聲は、空を劈きて來り、何やらん打ち喚く人聲は、喧々として之に續ぎ、連りに元恭の耳を打てり、元恭は猛かに起ちて、屹と壁する方を打ち眺むれば、煙臺の下に、八名の清人あり、一名の巨



大なる人物を圍み、亂打混戰、休む時無し、是れ強盜が、旅客を  
侵すに極まつたれば、俠骨飽くまで芳ばしき元恭の、争でか  
踏することあらん、十歩を一步に宙を飛び、彼の賊衆を目懸け  
て突進したり、元恭は賊徒を望みて、矢を射る如く、馳せ着く  
る内にも、眩度彼方に眼を注げば、八名の兇賊に取圍まれた  
る、彼の一人の旅客は、力を限りに格闘し居るものから、多勢  
に無勢の力敵せず、遂に兇賊等の爲めに其場に打ち伏せられ、  
一聲の悲鳴を擧ぐると共に、體を計りに倒れたり、兇賊共は、  
仕合せ好しと喜ぶもの、如く、彼の旅客が身に着けたる、一切  
の物品を、奪ひ取らんと競ひ掛れり、元恭は此有様を見て大に  
怒り、勇氣一倍、一散走りに駆け付けて、賊徒の群に割つて入  
りたり。

元恭は現場に至るや、大音揚げ、「悪つくき汝等草賊共、速かに  
奪ひしものを旅客に返して、善心に立ち還れ」と叱したるに、  
兇賊共は、不意の應援者に、驚きながらも能く見れば、敵は只  
だ一人の僧侶に過ぎず、器械とても、閃々たる刃光の、腕を奪  
ふべきものを持つるにも非ず、續く味方は一人もあらざれば、  
多勢を顧みて毫も挫かず、「己れ命知らずの賣僧奴が、飛んで火  
に入る笑止さよ」と、罵り返して諸聲合せ、元恭を目掛けて、  
八方より打ち掛れり、此時元恭は、日頃手練の、柔術の奥義を  
現はし、右に當り、左に當りて格闘しつゝ、一糸の隙を覗ひし  
よと見るまに、忽ち一賊の襟首攫みて、傍の溪底へ投げ落し、  
續いて飛び着く一賊をば足を揚げて亦た蹴落し、身を翻へして  
避けんとしたる、一賊の弱腰丁と打ち拂ひて、亦た溪底へ蹴落



したり、此に至りて流石の兇賊も、案に相違の勁敵に出逢ひ、敵は逃げんと、残れる奴原合せて五名は、命からく逃が散りたり、元恭は當の敵を追ひ散らして、現場に倒れたる旅客を視れば、其体格の大きく見えしも道理こそ、彼の旅客は洋人にして、其毛髪其他の恰好、總て魯國人の幹格を備へ居ることを見出したるが、彼の旅客は、身内に數ヶ所の打撲傷を受け、既に絶息して人事不省の有様なれば、元恭は兎も角も試みんとて、旅客を引起し、曳と一聲活を入れしに、至精の妙術は、直ちに呼吸を促進せしめ、彼の旅客は忽ち息を吹き返せり、元恭は心盡しの、甲斐の見しを喜びて、襟々に之を勒はり、有り合せの寶丹など與へて、其介抱に手を盡せしに、彼の旅客は、一時退々に正氣付きながら、苦しき息を斷續して、元恭の顔を見

詰りしが、一伍一什を、元恭より聞き取りて、其厚意の非常なるを感謝し、追れる息の下より、「自分は魯國陸軍大佐の官職を帯び居る、某と云ふもの」なる由、元恭に物語れり、左れと殘酷なる、兇賊の打撲せる傷は、深く頭腦其他の急所に當りて、元恭が一心籠めたる、襟々の介抱も、遂に其効を奏せず、哀れ國の爲めに探査に従事せる、彼の大佐が、三寸の息は茲に絶えて、万事頓に休せり、旅魂今夜滿洲廣原の何れに宿らん、元恭は此に至りて大に望みを失したるも、天命遂に之を如何共すべからず、懇ろに涅槃經を誦して、亡靈を引導し、茫々たる高原の中に、獨り大佐の屍に對して、彼が爲めに通夜の勤行を爲したり。



征清戦役中の遭難

元恭が四百州を跋渉せる時代に於て、清國政府大に哥老會に手  
 を入れ、彼の呂嘉祥が、會の首領たることを、探知したるより  
 呂嘉祥を逮捕に及ばんとせり、呂氏は亂邦に居るの、安全なら  
 ざるを覺悟し、元恭及び他の幕僚等と、共に難を米國に避くる  
 に至れり、元恭は米國より、歐洲及び印度南洋等に遊び、後ち  
 再び米國に航してイタノイス大學に入り、法學を研究し、我征  
 清役の初期に於ては、實に米國に居りしなり、然るに呂嘉祥は、  
 哥老會の運動上に付、深く慮かる所あり、元恭等を伴ひしか、  
 若くは彼等先發せしめしか、其邊の事情は不分明なるも、兎

に角元恭は、戦役の初期と前後して、又た復た清國に入りたり  
 しなり。  
 然るに清國は、文明の程度、未だ民と國とを識別するに至らず、  
 高も敵國の人民と見れば、無法の凌虐を加へて得たりとし、或  
 は貨を懸けて首を募り、或は悪告を容れて無辜を罰し、暴政を  
 施すこと至らざる無し、斯かる時節なれば、常人と雖も漫然清  
 國に入れば、不測の變に逢ふべきの恐れあるに、彼の元恭は、  
 豫てより哥老會中の有力者として、清國政府の畏懼する所と爲  
 れる人なれば、其遭難の事あるは、免れ難き事情なるが、殊に  
 元恭は大膽不敵にして、深く暴政の巢窟たる内地に入り、毫も  
 逃避せざることなれば、其遭難の數回に及びしも、亦た宜なり、  
 現に元恭は方廣寺へ歸山中、其友人に語りて、戦役中に於て、



「四たび危難に出逢ひたり」と云し、其状況を語りたるは、洞庭湖畔と、貴陽縣と、の二難のみ、左れば他の二難は、今其大要を語るの外なしと雖も、此時の四難は、直接に、清國政府を相手とし、若くは少くとも、清國政府の後援を有する人民を相手とせしめて、元恭が苦心も一方ならざりしは、勿論なるが、前後の事情を察するに、元恭は四百餘州の山川草木をのみ見て、四億の人あるを見ず、元恭が清人を見るや案山子の如く、豪然彼等を睥睨するの趣あれば、氏に取りては、蓋し左迄の事とも思はざりしなるべし、假しや元恭の眼中には、清國復た一人の人無しとするも、紛亂斯の如き危機に當りて、漫りに清國內地に深入するは、實に非常の危険を冒すものなり、元恭將た何の必要ありてか、此危険を冒し、以て長江の上流に溯りたる、元

恭は此事に付き、遼州の父兄に其用向の在りし所を説明せり、今彼れの言を借りて、此に其入清の目的を説き明さんか、元恭の語れる所は實に左の如し

「○先生(呂嘉祥)は征清役の起頭に於て、余等と共に米國に在りたり、然るに日清戦争の變起らんとするを聞き、先生は實に清國內地に在住する哥老會員が、此際俄に戈を執りて、革命の舉を起さんと企つるを恐れたり、此を以て余を清國に送り遣し、所在の義黨に傳令して、輒時謹慎を事とせしめ、決して輕舉妄發するが如きこと無からしめたるなり、余は此命を受け、米國よりして清國に入り、徽を飛ばして各地の義黨に移牒し、其妄發を戒め居りたり、○先生が、此際妄發を戒めたる所以の理由は、革命軍若し起らば、清國政府は腹背



敵を受け、到底之を支ふる能はざるべし、斯の如くにして我  
日本軍益す長驅し、革命軍益す彌漫せば、清國政府は必ずや、  
兵を露國に借るの窮策に出でん、果して然りとせば、義黨は  
毫も恩怨なき魯國を敵とし、之と死生を決するの失計に陥ひ  
らざるを得ず、義黨は決して今日に奮起すべからず、と云ふ  
の點に在りたるなり」  
元恭自身の所説は斯の如し、今之を案ずるに、在米太平洋岸の  
清國人中には、日清戦争の機を時として、朱明回復、滿清退放  
の大舉を起すべしと、論ずるものありとの事は、嘗て征清役の  
始めに當りて、米國に於ける新聞紙の報道せし所なり、其首領  
たる呂嘉祥の所説は、果して此に在りしや否やは知るべからざ  
るも、要するに哥老會は、彼の時に於て必ず動搖せざるを得ざ

るの運命を有せり、之を革命斷行と決するも、將た非斷行と決  
するも、二者共に會の一大事なり、呂嘉祥果して非革命主義を  
執りし乎、元恭果して革命主義を戒めたる乎、其事の如何は暫  
く措き、呂嘉祥若くは元恭の如き樞要の會員は、兎も角も足を  
清國に投じて、之を衆員に宣命するの必要あり、元恭が挺身し  
て清國に入りたる所以のもの、亦宜なりと謂ふべし、思ふに呂  
氏亦元恭と前後して、清國に返りたることはわらざる乎、兎に  
角に是等哥老會の運動は大に清國政府の注意を惹き、元恭等を  
物色すると甚だ急なり、此に於て乎、果然、洞庭湖畔に於ける、  
元恭襲撃の舉は、元恭が征清役中に蒙りたる、四難の最先に  
來れり、洞庭湖畔の危難とは何ぞ。



洞庭湖畔の危難

元恭は、哥老會の運命を決すべき、緊要の用務を帯び、北米よりして清國に入れり、元恭の用務は實に此に在り、故に元恭は先づ上海に至りて、之より長江に溯り、以て湖南湖北の兩省、其他所謂中原の地に徘徊したり、抑も哥老會の主義は、滿清と共に地を踏まず、滿清と共に天に敵かず、必ず明朝を回復して、漢族の天下を建設せんことを圖るに在り、故に哥老會の根據地は主として清國の湖南、湖北の中原に在り、蓋し江蘇省の江寧府、即ち彼の呂嘉祥が學校を開ける地は、所謂南京にして、明朝累代の帝都たり、左れば朱明の遺跡は、實に湖江の南北に在るを以て、朱明の主義を奉ずるもの、此方面に多きは疑ふべ

うもあらず、現に彼の有名なる長髮賊が起れるときも、亦た南京を占領して、根據地と爲したる事にして、哥老會が顧み切りたる根據地の、湖江中原地方に在るも、亦た宜なり、左れば元恭は、湖の南北を巡遊して、各地會員に對し、其將來の心得を傳令しつゝありたるが、某の月某の日を以て、恰も湖南省の洞庭湖畔に入り、此に某旅店に投宿したり。清國粗大なりと雖も、其探偵も亦た全く盲目に非ず、元恭が米國より、清國に入りしは、夙に彼等の看破する所と爲り、怪しき日本人の、中原地方に立廻り居ることを報せしかば、各地の道臺、巡撫等の地方官は、日本人の首に向つて、賞を懸け、之を民衆に募れり、然に目の無き清國の暴民等は、豫てより怪しき日本人に注意し居たる折柄とて、元恭が洞庭湖畔に來りしを



認め、一黨數十名、申し合せて元恭の投宿せる旅店を襲へり、元恭は表の方の噪がしきを聞き付け、何事ならんと耳聳つれば、其噪がしき聲は、正に「日本人を殺せ」と絶叫するにてありけり、暴民の多寡は固より知れざれども、大胆なる元恭は少しも騒がず、静かに居室の四邊を見れば、一段窪みたる床の間あり、是れ偏強の後楯なりと見て取り、身を此に寄せて、暴民の入り来るを待てり、彼等暴民は、追々に元恭が居室に、闖入し來りしが、一隊總べて十有四名、手に刀劍を持ちて、元恭に切つて掛らんとす、元恭は此に至りて、精神益々加はり、最初に掛りし敵の利腕振り上げつゝ、鋭へに鋭へし、柔術もて、忽ち彼れを打倒し、其刀を奪ふ途端に、手近の奴原兩名を、電光石火の動きもて、一刀の下に切り倒せば、流血淋漓として、四

壁音赤し、元恭は刀を振ふの傍ら、柔術の手續をも顯はし、二人の敵を湖中に投じたる、至妙の武術を見て、彼の暴民等は争でか休へん、先を争そふて逃出たせり、元恭は敵の弱りし機に乗じ、大喝一聲兩三聲、彼等の腕を奪ひつゝ、後ろの方より追ひ掛くれば、暴民は愈々其度を失ひ、表の方に逃げ出づるを、血刀打振り、追ひ廻らんとするにぞ、戶外に控へし群衆のもの共も、皆一齊に逃走したる、其有様、恰も群羊の猛虎に驅らるる如くにて、手に立つものゝあらざれば、元恭は茲に逃脱の機會を得て、忽ち跡を晦まし、豫て相知れる寺院に入り、服を更めて、身を清國人の姿に扮し、湖南を西北に横断して、貴州を目指し進行せり、此時の元恭が胸中には、如何なる感愛を起したりやとの問ひに對し、元恭は遠州の父兄に語りて、「余も、勿



論、豫て覺悟は定め居りしも、湖畔の旅店にて、突然「日本人を殺せ」との叫聲を聞きしときは、彼等が余を物色し得たる事の、餘りに火急なるに驚きたり、左れと彼等暴民は、固より義の爲めに働くものに非ずして、恣の爲めに働くものなれば、濫りに多勢を頼むと雖も、二三人の血を見れば、決して搦進し來るものに非ざるは、明かなれば、余は彼の叫聲を聞くに等しく、止むなく一兩名を、血祭りにせんと決心したり、併し敵は多勢なり、背後を擁されては、不覺を取るの恐れあれば、床の間を後楯とし、徐かに其入り來るを待ちしなり」と云へり、元恭の勁腕と剛膽とは、併びに驚くべしと雖も、其敵に臨むの用心も亦見るべきものあり、蓋し此時は實に元恭が、征清戦役中遭難の最初に屬し、數年間閉居したる武力を、久し振りにて應用し

たる始めなり、之より後、腕益す勁く、膽愈々張り、一難を経る毎に一勇を増し、遂に四億衆中に獨歩して、關羽の五關を連破せる、亦必ずしも驚異すべからざるの意氣を顯はすに至れり。

眼中人無し

元恭の遼州人士に語れる所に依れば、征清戦役中には、洞庭湖畔の一難の外、尙二回の危險を経て、幸に之を避け得たる後、遂に最後の大難たる、貴陽縣署拘留の災に逢ひたりと云へり、而して遼州の父兄、其所謂二回の遭難を詳にするもの無く、其事得て推究し難しと雖も、奥山村民の一人は元恭に聞ける所なりとて語りて云ふ。「何とか云ひけん、其地名は肥臆を失したり



と雖も、元恭氏は一たび、清國の牢獄に投ぜられたるもあり、此時は元恭氏も復た術の施すべきなく、空しく囹圄の内にて、逃脱の策を案じ居りたるが、一夜人定まるの後、一名の清國人は元恭氏が樞房の前に來り、其鎖鑰を開きて元恭氏を救ひ出さんと擬せり、氏は何もの共、知らざりしが、好意辭すべからず、彼れが導く儘に樞房を出せしに、彼れは元恭氏を掩護して、牢獄の門を脱せしめ、元恭氏が引留むるをも顧みずして、又獄内に還り去れる事ありと聞けり」と、思ふに是れ所謂四回遭難中の一回にして、其牢獄を救ひ出せるは、彼の清國の義黨が、元恭氏の爲めに、獄吏に賄賂し、獄吏之を聽許して、元恭幸に逃脱するを得たるなるべし、其地の何れなるやを逸したるは惜むべきなり、又右の村民は語りて云ふ、「元恭氏は何れかの地に於

て、青木喬氏と邂逅し、共に警察署を尋かして、首尾能く逃脱したることあるやに聞けり」と、彼れは之より其肥體する所の事實に付き、元恭が膽勇の事情を語れり、其脱く所を以て之を案するに、征清戦役中、清國の新聞紙が、曾て報道したる所と符合せり、即ち是れ所謂四回遭難中の一回なるべし、而して此遭難は、元恭が之を挑撥したるものにして、寧ろ買難と云ふを當れりとす、是れ實に暴虎馮河の行ひに近しと雖も、苟も自家の名を榜示して、其首に賞を懸くるの濫なるを見ては、人難れか激せざらんや、元恭の意氣は益々昂れるの際なれば、其一舉を試みたるもの亦宜なり、乞ふ之より進みて、其一難の轉末を叙せん。

元恭は不思議の首尾にて、牢獄を脱せる後ち、湖南若くは貴州



の方面に於て、青木喬に出會せり、青木は九州の人にして、亦た彼の呂嘉祥の知遇を受け、學資を呂氏に給せられて、元恭と共に、米國イリノイ州の大學に入り、共に同大學の法科を卒業したる、元恭の學友たり、又た清國の關係に於る政友たり、且つ呂氏の同門下たる人なり、思ふに征清役の始め、二人は同船か、又は相前後して、米國より清國に入らざるべく、其の志の存する所も、亦た略ぼ知り得べしと雖も、元恭と落ち合ふの約束ありて、此處に落ち合ひしには非ず、多分兩人が運動の結果、期せずして此處に出會せしならん、其地名の如きは、今詳かならずと雖も、湖南の西、若くは貴州の東に於る、某地に於て、兩人は端無く出會し、其處に前途の經營に付き、商賈を凝らしつゝ、市中を巡覽し居る内、往來の札の辻とも、謂ふ

べき所に至れば、「釋元恭の首を獻するものには、千兩を賞せん」と、揭示しあるを見たり、元恭は心に激昂し又も冷笑して、「丁度警察署の前に入る、料理屋に入り、青木と共に食事の支度を悠々と済まし、兩人相談の上、一つ慰みの種にせんと、大膽なる企てを起したり、斯くて元恭は、料理店の扉を呼び、一封の書面を渡して、之を彼の料亭の向ひなる警察署に、持ち行かしめぬ、而して其書面には、何事を認めしかと云ふに、「吾元恭今此に在り、然れども吾毫も死に當るの罪なく、且つ吾首は僅々なる千兩に換ふる能はず、因て首を獻すること又は平に斷絶す」と、警察署は、此大膽なる挑戰狀を送られて、且つ驚き、且つ怪み、且つ怒り、急に巡查を驅り催ふして、彼の料亭を圍まん」とす、彼等の一隊、料亭の前に至れば、元恭は青木と共に往來